

第56号

学体連会報

令和元年度



公益財団法人 日本学校体育研究連合会
(<http://www.gakutairen.jp>)

ASHIMORI

足の健康を守り育む「良い靴」の最も大切な条件とは、
長さ幅ともに「足のサイズに合っていること」
足に合った靴を正しく履いて、足の健康を守りましょう。

足守
ASHIMORI



JES-009

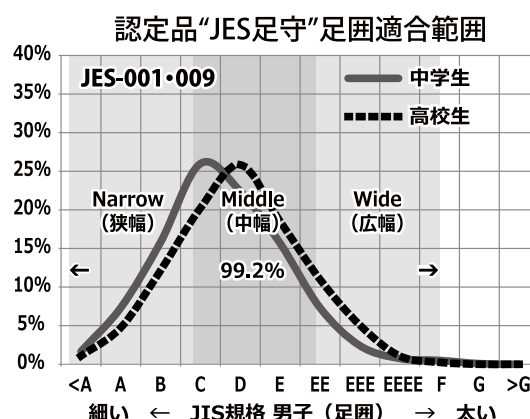
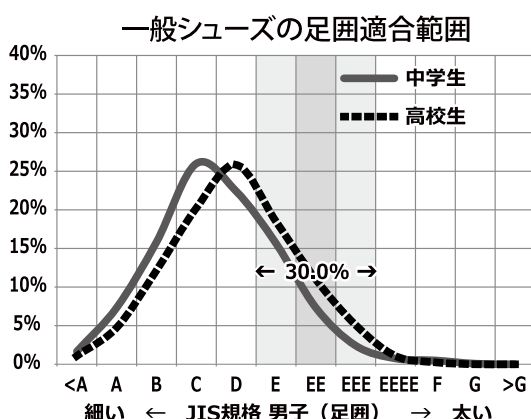
Triple Fitting System
Wide・Middle・Narrow



● Wide(広幅) ● Middle(中幅) ● Narrow(狭幅)

子どもたち 10,000 人の実態調査から生まれた「JES 足守シューズ」
科学的根拠に基づく有用性が、高い評価を得ています。

単ワイズの靴では足囲の適合率が低く、足への影響が懸念されます。



児童生徒の安全確保や、体力向上のため
学校体育用具・用品の、ご検討・ご選定にご活用下さい。



JES日本教育シューズ協議会

本部事務局 〒101-0032 東京都千代田区岩本町 3-3-4
TEL. 03-3862-8684 FAX. 03-3862-8632

「改訂学習指導要領 体育・保健体育で育てたい力は何か その3」

会長 本村清人



北九州豪雨、台風十五号により被害に遭われた皆様に対して、心からお見舞い申し上げます。

昨年のこの会報では、①「やつと現行の学習指導要領になじんだところでもまた新しいものになる」について行けない」などの声があること、②国の学校教育の目標、内容、内容の取扱い等が大きく一八〇度変わることは基本的にはないこと、③指導方法は教員の指導の工夫に待つところ大であったが、ある意味、国が指導方法まで踏み込んできたこと、④子供たちの運動欲求や、技能・体力の習得・向上への欲求が満たされているのか疑問に思う場面も少なくないこと、などを述べました。

今年はその続編にしたいと思います。ひとつは、上記③については国の表記が「アクティブラーニング」から「主体的・対話的で深い学び」となり、単なる指導法で

はなく、「授業改善の視点」だということが強調されていることに留意したいと思います。ふたつには、この六月のある新聞記事（専門家のコメント付き）に驚きました。それは、「作戦会議や映像を見たり振り返ったりするなどの時間が四十五分のうち約四割、実際に運動した時間が約三割、移動や水飲みなどで約二割、教員の指導時間は約一割。このような授業がこれから推奨される体育の授業である」と。皆さんはどのようにお考えになりますか。いづれの「指導」ではなく「支援」がこれからあるべき姿だとか、「言語活動」を全教科等で重視すること等が強調されてきたその流れがここまできたのかという驚きを禁じ得ません。これで本当に「思考力・判断力・表現力等」は身に付くのでしょうか。その大元となる「知識・技能」が教師の指導一単位時間のうちの割で何が身に付くのでしょうか。それで「学びに向かう力」がどの程度高められるのか、多様な子供たちがいる中で、ほとんど発言や気付きを述べることもない中で、仲間との関わりがどのくらい保証されるのか、それで「人間性等」が果たしてどこまで育まれるのか。このように考えると、

「これからの授業づくりを、授業改善をどのように考えたらよいのか」、「体育の中心的指導内容と重点課題は何か」、「二〇三〇年に向けた学校体育の果たす役割は何か」について改めて真剣な振り返りと具体策を検討することが肝要と考えますが、如何でしょうか。その時のキーワードは「体育固有の特性は何か」、「その特性を生かすこと」と考えます。

今回の会報では、平成二十八年からシリーズで始めた座談会の第四回目の内容をお伝えしています。テーマは「学校体育に求められている改革とこれからの体育・保健体育」です。言葉を換えれば、新学習指導要領が目指す体育・保健体育で育てたい力は何かということに迫る座談会です。大きな示唆を得ることができます。これらの情報を参考に授業の充実が一層図られることを期待しております。おわりに、公益財団法人日本学校体育研究連合会は、お陰をもちまして来年、設立七十周年を迎えます。五月に、記念式典と祝賀会を、そして記念誌の発行を予定しております。これまでの関係各位のご努力に対し改めて敬意と感謝を申し上げます。

表紙にある学体連ロゴマークについて



(財)日本学校体育研究連合会

上部の円は幼児を、それを受ける形で3つの弧が描かれている。小さな弧から順次、小学生、中学生、高校生を表示している。幼児・児童・青年がしっかりと大地に足を踏んばり、両腕を高くかかげて、生き生きと運動している姿をイメージすることができる。子どものあり得べきシエマを発展的系統的に象徴している『学校教育のシンボリズム』ないしシンボシエマ。図柄は紫紺の地に白抜きである。(会報第28号浅田隆夫理事長（当時の役職）)

目次

- ・会長挨拶 1
- ・座談会 2
- ・全国学校体育研究大会近年度開催地紹介 18
- ・第57回全国学校体育研究大会佐賀大会を終えて 19
- ・第58回全国学校体育研究大会埼玉大会開催にあたって ... 20
- ・埼玉大会分科会授業の見どころ 21
- ・最優秀校（文部科学大臣賞）受賞校紹介 24
- ・体育授業優秀教員紹介 25
- ・全国学校体育実技指導者講習会について 26
- ・平成30年度各都道府県教育委員会長期研修生等
合同発表大会 30
- ・令和元年度 ジャスベ^{あしいく}足育の推進について 33
- ・平成30年度賛助会員（個人）一覧 42
- ・令和元年9月期賛助会員（法人）一覧 43
- ・広告 44

〒151-0052 東京都渋谷区神園町3番1号
国立オリンピック記念青少年総合センター内
公益財団法人日本学校体育研究連合会
電話03-3465-3954 FAX03-3465-7464
発行者：本村 清人
発行日：令和元年10月15日
mail: gakutairen@msb.biglobe.ne.jp

座談会

日時 令和元年 七月二十七日(土) 午後一時から
会場 公益財団法人日本学校体育研究連合会事務局

新しい学習指導要領に向けた動きと運動し、「学校体育に求められている改革とこれからの体育・保健体育」をテーマに、シリーズで座談会を実施します。

今回は、「資質・能力をはぐくむ学習評価」について話をいただきました。

菅原事務局長

きょうは暑い中、おいでいただきありがとうございます。

外を見ますと緑がいつぱいです。そしてこの日差しが、農家

の方たちにとっては幸せな日差しではないかと思います。

さて、きょうお集まりいただきましてお話いただくのは、本会の会報の巻頭を飾る大事な部分です。これは全国大会で配付

しますが、手にした先生方は、まずこの座談会のところを見る

そうです。そして、すぐためになったというお話をよく耳に

します。皆さんのお話は、全国の先生方の期待を担っているの

だと思えますので、どうぞよろしく願います。

きょうの内容は「学校体育に求められている改革とこれから

の体育・保健体育」という大きなテーマで続けて参りました四

回目、「資質・能力をはぐくむ学習評価」についてお話をいただく

ことになっております。小・中・高を代表する先生方

がお集まりいただいています。新しい学習指導要領に向けて、

みんなが知りたい学習評価です。どうかよろしく願います。

吉原理事

《趣旨及び進行について》

本日の座談会では、次の三つの柱でお話を進めていただきました

と考えております。一点目は、学習評価の現状、

現行学習指導要領における学習

評価の成果と課題について。二点目は、三つの観点、そし

て「主体的・対話的で深い学び」

が示されましたが、こうしたことを踏まえて考える、新しい学

習指導要領における学習評価の視点や配慮事項について。

三点目は、今後実践されていく学習の中で想定される課題と

その解決に向けた方策案。先生方の実践、お考え、ご意見等を踏まえて、この座談会を進めて

いただきますと存じます。よろしく願います。

なお、私もお話に参加させていただく場面があるかと思

います。ご承知おきください。座談会の進行につきましては、

学体連理事長の日本体育大学教授、岡出美則先生にお願いをい

たします。岡出先生、よろしく

願います。

岡出理事長

本日の進行を務めさせていただきます。日本体育大学の岡出

です。よろしく願います。最初に、先生方の自己紹介を

お願いいたします。

下橋 良平先生(小学校)

港区教育委員会事務局学校教育指導課の指導主事、下橋と申します。

私は今、東京都港区の区立幼稚園・小中学校を担当していて、

体育だけではなく、幅広い業務に取り組んでおります。特に港

区は都心に位置する区ですので、全国の先生から見ると環境が特

殊な部分もあります。体育のほかにICT教育なども担当し、

経産省が進めているエドテック

を活用した未来の教育の在り方を推進する担当も務めています。

小学校教諭のときには、平成二十五年の東京都開催の全国大

会で、分科会会場の研究担当を務めたことが、私のポジティブ

な記憶として残っています。どうぞよろしく願います。

ます。

藤 至光先生(中学校)

横浜市教育委員会事務局、学校企画部小中学校企画課で指導主事をしております藤と申します。

現在私が担当していることは、学校体育全般と運動活動時の安

全に関すること、武道における安全に関すること、そして部活動支援に関することなどです。

教員時代には、横浜市の中学

座 談 会 出 席 者



港区教育委員会
指導主事

下橋 良平 先生



日本体育大学
教授

岡出 美則 先生



桐蔭横浜大学
客員教授

吉原 昌子 先生



山形県立南陽高等学校
教頭

佐藤 若 先生



横浜市教育委員会
主任指導主事

藤 至光 先生

校保健体育研究会に所属し、授業研究や学習評価についての研究に取り組んできました。
本日はどうぞよろしくお願いいたします。

佐藤 若先生（高等学校）

山形県立南陽高等学校で教頭をしております佐藤若と申します。

授業研究を通して指導の在り方や評価について勉強しているところです。これまで、文部科学省から出された水泳の手引書作成等の協力をさせていただきました。

本日は学校現場の立場から、日頃考えていることをお話しさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

岡出理事長

それでは、座談会に入ります。今回のテーマは、「学校体育に求められている改革／資質・能力をはぐくむ学習評価」です。このことを論議するに当たります。まず現行の学習指導要領を学習評価という観点から見

直してみても、各学校種でどういう成果があり、あるいはどういう課題が残されていると感じておられるのかを率直にご紹介をいただきます。

下橋 良平先生（小学校）

小学校の体育授業をこの十年の実際から考えてみました。平成二十二年に国立教育政策研究所から「評価規準の作成のための参考資料」が出されて以降、各小学校の実践では、確実に単元の評価規準、学習活動に即した評価規準を設定した実践が増えてきたと思います。その中で、評価計画、評価の重点項目、その時間、何を評価するのか、どのように評価するのかといった意識は、現場の先生方もしつかりもつてきているというのが現状だと思います。

ただその中で、国研の資料にも具体的な子供の姿、これを想定しておくということは示されているのですが、小学校では体育を専門としない教員も多くいる中で、子供たちの具体的な姿、評価すべき姿について明確にならない現状も課題としてあ

ります。冊子に掲載されている評価計画に沿っていくと、全国どこに行っても同じような規準になってしまふ。先生方は「指導と評価の一体化」を意識しつつも、具体的にはどんな姿がよい姿なのかというところまで考えられていない現状があったというのは、これからの課題と捉えています。

岡出理事長

そういう取組をされてきた結果、子供たちがどういう力を伸ばしてきたかを少し補足していただくと、三校種の違いもよく見えてくるかなと思うので、補足していただいてよろしいですか。

下橋 良平先生（小学校）

小学校で子供たちが、現行の学習指導要領の中で伸ばしてきた力としては、子供たちが課題を解決していく中で、運動に親しむ資質や能力を育成してきたことが挙げられます。小学校の教員は、そのために、つまぎの見える児童に対する具体的な手立てを考えることができる

ようになってきています。子供のつまぎの例をもとに、先生たちが適切な支援・手だてを考えることによって、運動を楽しめていない状況から楽しめる状況に近づけていったという現状があると思います。

岡出理事長

では、藤先生、よろしいですか。

藤 至光先生（中学校）

中学校の成果として挙げられることは、指導と評価の充実が図られたという点だと思います。具体的には、三点お話ししたいと思います。まず学習指導要領の指導内容の体系化、それから明確化されたということから、学習指導要領に示す目標に照らして、その実現状況を見る評価がしやすくなったと思っています。

二つ目としては、観点別学習状況の評価における「目標に準拠した評価」への理解が深まってきたと思います。生徒一人一人の進歩の状況、そして目標の実現状況を把握しながら、先生

方の形成的な評価を通して、子供たちに適切なフィードバックが行われてきたことだと考えます。

三つ目としては、評価規準を作成して、それを抛りどころに子供たちの実現状況を評価するということで、いわゆる「指導と評価の一体化」というのが図られてきているのではないかなと感じています。

課題はその裏返しになります。

二つ挙げるとすれば、学習評価が本場に子供たちの学習の改善に役立っているのかという点と、中学ではその先に進路選択、高校進学があるので、評定を出すことに主眼が置かれてしまっているのではないかという点です。学習評価を通して、子供たちをよりよく変容させていくということが大事だと思いつつ、評価規準は作成しているけれど、それをもとに評価ができていくのかどうか、見取れているのかどうかというところが課題としてはあると思います。

佐藤 若先生（高等学校）

お二人の先生方からお話が出



たような内容で、重複してしまうところもあるのですが、観点別学習状況の評価における「目標に準拠した評価」を行ってき

ましたが、「指導と評価の一体化」が図られ、いつ何をどのように評価するのかということが、非常に明確になったのではないかと感じております。

高校は特に技能を中心とした指導であつたように感じていましたが、「関心・意欲・態度」「思考・判断」「知識・理解」にも焦点を当てた指導の充実が図れる方向に変わっていったと感じております。

ただ、一方では、評価に関して課題はあります。技能は単元の最後にスキルテストをやればいいのか、知識はまとめてペー

パーテストを行えばいいというところもあります。形成的评价が浸透していない部分もあるのではないかと感じています。

それから、自分自身もそうでしたが、評価について共通性の担保が難しいと思います。同じ学校で指導しているにもかかわらず、先生によって評価の見取りが違うこともあり、評価がぶれてしまうところがあるのではないかと感じているところです。

岡出理事長

今のお話を聞いて、先生方の中で違う学校種のお話について、ちよつと聞いてみたいんですけどもというものはないですか。

例えば小学校の場合、現行では知識は評価しないですよ。中・高の場合は観点に入っているので評価する。校種によって評価のイメージとか、子供が身に付けている力のイメージが違っている可能性もあるような気がするんですよ。また、「思考力・判断力」云々のお話がありましたけれども、子供たちは、そうした観点の力をちゃんと伸

ばしてきているかどうか。先ほど、技能中心というお話に対して、小学校や中学校ではどう捉えているのかなど、補足していただくと、お互いに具体的なイメージがつかめると思っています。

そういうことも含めて、お互いに少し質問をしていただくとか、補足していただけることがあれば出していただきたいと思います。

藤 至光先生（中学校）

今、岡出先生がおっしゃった「思考力・判断力」の話です。横浜の中学校では、資料として学習カードを使って、「知識や技能」、「思考・判断」、それから「関心・意欲・態度」を子供たちが自己評価したり、相互評価したりして、自分たちの状況を確認します。そして記載された内容について教師側も、子供の現状を確認することに取り組んでいます。

小学校もそういった方法で取り組んでいる学校が多いのですが、高校はどうなのか、私も情報が少ないために、高校での「思考力・判断力」を身に付けるた

めの手だてだったり、評価の仕方だったりというのはどうなっているのかということを、お聞きしてみたいと思います。

佐藤 若先生（高等学校）

今ご質問あったように、四つの観点の中で、一番難しいと思うているのが、「思考・判断」だと思います。それは、なぜ難しいのかというと、考えていることを表出できる子とできない子がいるという点です。そういったことを考えると、教師が見取れるように、学習カードの改良を積み重ねて作られている学校が多いと思います。

私自身、学習カードは非常に有効だと考えていました。学習カードも、ただ単に書かせるだけでなく、授業計画を立てるときに、学習をさせたい内容の学習カードをあらかじめ全部セットしておく、子供たちが明確に順序立てて考えることができると思っています。思考力・判断力を高めるためには、知識が何もないところで課題を見つたり修正したりということができないので、単元の始めの段階

でしっかりとした知識を身に付けて、できる、できないという生徒の技能レベルにかかわらず、きちんと課題を見つたり、人にアドバイスできるように指導することが大事であると思っています。

下橋 良平先生（小学校）

小学校の知識というと、現状小学校の教員としては、体育の知識イコール保健だけというイメージでした。ただ、学習指導

要領の中では、「思考・判断」の中に知識が含まれていますよというところで一定の理解をしている教員が多いと思います。その知識をどう子供たちが活用していくかというところで、例えば器械運動で、学習カードにマツト運動のポイントが全部網羅してある。それを子供たちが活用して、これからの学習指導要領で言えば、伝え合いとかになりますけれども、かわりの中で学びを深めていくという学習がすすめられてきました。

これから、子供たちがいかに主体的に学んで技能と関連付けながら知識を習得していけるよ

うにするかという授業づくりをしていくことで、知識の捉え方は大きくかわっていくなという印象を抱いています。

岡出理事長

現行の要領における「思考・判断」についてのお話ですが、その「思考・判断」も、小学校と中・高では、何を対象にして「思考・判断」をするのかによってイメージが違ってくるがあると思うんです。

中・高もそうなんですけれども、小学校の場合の「思考・判断」の対象というのは「何々を選択する」と書かれていますよね。何を選択するのかというと、小学校の場合は、技術的な課題とか、練習の仕方とか、そういうものを自分に合ったものを選択していくというイメージだと思います。中・高では、そればかりではなく、役割についてとか、そういうことも自分たちできちんと選択するというのが「思考・判断」の対象になつてい

ると思うんですね。そういう意味では、何を「思考・判断」の対象にするのかと

いうのは、小学校の先生方のイメージと中・高の先生方のイメージは意外に違っているのではないかなと思います。逆に中・高の先生方にとっては、「思考・判断」の対象で、技術的な課題を見つけるとか、練習方法の選択とか、今までどのようにやっておられたのかなというの

は、小学校の教員からするとなかなかイメージが湧きにくいところだと思うんですけれども、その点はいかがですか。

藤 至光先生（中学校）

先ほど申し上げた学習カードを活用して、子供たち一人一人が自分の状況を把握し、まさにメタ認知をしてどういうことができるようにしていこうかというときに、やはり中心になつてい

そういえばと思い出すのは、友達とかかわりという点では、ペアで学習をしたり、トリオで学習をしたりという中、友達のできばえを見てアドバイスをするとか、手助けをしたりするかという、そうしたかわり方を考えている生徒もいたなと思うんです。

また、見学せざるを得ない生徒が仲間に協力するというめあてを設定して学習に取り組んでいたのですが、これも「思考・判断」の対象だったことを考えると、捉え方が不十分だったかなと今振り返ったところです

佐藤 若先生（高等学校）

高校では「体の動かし方や運動の行い方」「体力や健康・安全に関すること」「運動実践につながる態度に関すること」「生涯スポーツの設計に関すること」の四つの「思考・判断」がありますが、「体力や健康・安全」であつたら、危険因子を最初に挙げてみようという活動を組んできました。オリエンテーションで基本的な健康・安全について押さえた上で、例えばバレーボー

ルをするに当たって、環境要因

と人的要因に分けて挙げるなど、生徒たち自身が意識しながら、今までの知識を活用して、グループ、または全体としての意見をまとめていました。また「生涯スポーツの設計」では、単元の最後のあたりで、これから学校を卒業した後にとどのようにスポーツとかかわっていただけるか、内容をイメージしてみようなど、今できることを考えてみようという活動で技能だけに特化したものでないように取り組んできました。

岡出理事長

解説書の例示項目で言うと、今言ったように、小学校は基本的に技能のことしか書いていないわけですね。中学校、高校では例示項目を見ていくと、これも入っているんだと思うんですね。逆に言うと、解説書の例示項目まで見ないと、具体的なイメージがなかなか湧かないのではないかなと思います。書かれてはいるけれども、実践している割合は、かなり低い可能性があるという気もするんですね。

すね。

それでも、「指導と評価の一体化」という言葉をもとに指導計画を作る、教える内容を踏まえて子供たちを評価する標準を作る。そして子供たちの学習の状況を把握して授業改善につなげる。そうしたことは、この十年の間でかなり多くの先生方が実践されてきたのかなと思うんですね。

この十年間で、授業に関してどういう試みが生まれたと先生方は感じておられるのでしょうか。それから、特に評価方法ですよね。評価の仕方に関しては、一昔前に比べて、違った試みがされるようになったんじゃないでしょうか。例えば先ほど言われたように、子供に自己評価をさせるとか、友達と相互評価させるというのも、以前は余りやっていなかったのではありませんか。もう一度この十年を振り返っていただと、以前に比べて新しいことがきちんと行われるようになってきたのではないかなということをご紹介していただくことは可能ですか。

藤 至光先生（中学校）

学習評価では、一つ前の改訂で全面的に「目標に準拠した評価」になったわけですね。その時に「目標に準拠した評価」と教師の認定評価みたいなものが混同されて、誤解されていたような、そんな時代があつたのではないかなと思います。それを知っている教員経験の長い先生たちは、そのまま平成二十年改訂の学習指導要領も同様の学習評価に取り組んでいたように思います。

逆に新たに教員になった方たちは、新しい情報を知って、まさに「目標に準拠した評価」はこういうものだということを理解してやっているように思います。そこで現場では、考え方が合わないところがこの十年であつたのではないかなと感じます。

どのような試みをしたかという点では、「目標に準拠した評価」自体が子供たちの一人一人の実現状況を見ていく、進歩の状況を見てあげられる、こういう評価が変わってよかったよねという方向に進んだはずなので、

そういうことがわかるような学習指導と評価を行っていたと思うんです。その一番中心になつていったのが、学習カードを活用した学習で、自分自身を知るために自己評価する、自分のことがわからないから友達に見てもらって、評価してもらう。それを繰り返しながら、こういうことができるようになりたいという願いをもつて学習に取り組めるような状況を、先生方が作っていくことができたのではないかなと思います。

下橋 良平先生（小学校）

小学校でのこの十年の評価について考えていきますと、具体的なところでは、技能についてはほとんど観察ということで、子供たちの具体的な姿というイメージができていたと、適切な評価ができていたと思います。しかしながら、小学校は体育を専門としない教員も多いです。実際に技能が本当にできているのかどうかという点でも、何となくできているという感覚のまま評価をしているという教員は多かったように思います。

す。

一方で、「思考・判断」については、学習カードでの見取りの中で自分が知識を活用して考えていても、小学校の場合は、例えば文字で表現できないとか、学習カードに自分の思いを表わしきれないという子供たちの様子を見取れていなかった現状は、今も課題として残っているかと思えます。

ただし、この十年の後半では、

ICT機器の教育現場への導入がすすんでいきますので、多くの実践の中で子供のパフォーマンスを撮影して評価できるようになってきていると思います。小学校の教員は、三、四十人くらいの児童が活動している中で、確実な評価を行うのが難しい現状があります。そこで、このICT機器の活用というのは、これから先もっとも有効になっていくと考えます。

佐藤 若先生（高等学校）

技能の評価については、学習指導要領解説に例示が記載されるようになってから、動きをきちんと見取る評価になってきて

いるのではないかと感じています。

しかし、「関心・意欲・態度」の評価は難しいなと常に思っています。小学校でビデオ等という話がありましたけれども、高校現場ではなかなかそうした取組はできず、それが教師間の評価がぶれる要因でもあるので、やはり課題なのかなと思っています。

岡出理事長

先ほど「目標に準拠した評価」のお話がありましたが、「目標に準拠した評価」と「絶対評価」は違うんですと言われていた人たちがいたんです。「絶対評価」というのは、物差しがあつて、それは狂わないということですね。絶対値の規準があるので、それに即して評価をするという意味で、ほかと比べて高い、低いじゃなくて、この物差しに即して評価をするという意味で絶対評価だ」と。

ところが、この物差しの目盛りは何に基づいて決められているのかということが問題で、「目標に準拠した評価」の場合には、

学習指導要領で示されたことが物差しになって、子供たちがどれくらい身に付けているかについて評価をするわけです。そういう意味では、「目標に準拠した評価」と「絶対評価」は一緒にしてはいけないというのとらえは必要だと思うんです。

他方で、今お話があつたような、学習カードに書くとか、何か印をつけるとか、あるいは発表させるとか、こうしたことをなぜやらないといけないのかという話になると、子どもたちが考えていることは、指導者にはわからないわけです。技能とかはまだ見やすいと思うんですけれども、考えていることは、外から見てもよくわからない。行動だけ見てもよく

わからない。なので、その子供たちが考えていることを抽出しようとする、書かせてみたりとか、人と話させてみたりとか、そういうやり方をしないと抽出できないということで、こうした評価法が出てくるということだと思うんです。見たいものにに応じて評価の仕方を変えているということだと思うんです。

そのときに問題になるのは、例えば、サッカーとかバスケットの授業で、ゲームができるようになることがねらいであると示すわけですが、ゲームのパフォーマンスで評価しているかという、実は体力テストの結果で評価しているとか、例えばシュートのドリルをやつて、そのシュートドリルの得点が高い子を高く評価するとかということがあつて、授業で教えたことがゲームでどの程度できるようになっていのかということ意外と見ていなかったりするわけです。またそのやり方がよくわからないといったことも起こっているのではないかと感じたりはします。

ですので、学習指導要領の実施状況調査で、小学校では例示項目にあるようなゲームを提供して、それがどの程度できているのか、こういう評価の仕方に変えたわけですね。そうすると、皆さんが難しいと言われていたボールを持たないときの動きとかを現行の学習指導要領には組み込んだんです。実際に状況調査をとつてみると、みんな賢く動いているということがよくわかるんです。でもボールをうまくキャッチできなくて落とすとか、それはボールの扱い方の問題です。その前の動きはちゃんとよく理解できているよねと。そういう機会もたくさんあるよねということがわかる。そのように子供たちを見てあげると、できていると思えるものが増え、増えると思うんですよ。

「目標に準拠した評価」というのは、教えてどの程度できているのかを見てあげること、子供たちのできばえに対する見方がかなり変わっていったり、指導者が見られないものは、子供に聞かないといけないので、聞くことで授業改善を図るとか、



でも変わってきたよねといった印象はいかがでしょうか。

藤 至光先生（中学校）

多くの学校がどうだったかという話ではないので、岡出先生の質問の答えにならないかもしれませんが、先日、ある先生とハンドボールの授業のお話をしたことがあったんです。

三年生の選択の授業で、今、おっしゃった技能のボールを持たないときの動きとボール操作というのを意識しながら指導していたその先生は、選択してハンドボールをやりたい子たちが集まってきたので、ゲームの質も選択できていいんじゃないかというのを考えたらしいんです。スポーツ志向で本気でゲームをしたいという子たち、または自分たちは余りうまくないから、ちょっと緩やかにのんびりやりたいという子たちがいたそうです。

その中で、二人の生徒の紹介がありました。一人は男子で運動能力が高い生徒。普通に考えるとゲームをがんやりたいと思える子が、何とのんびりや

りたいと。何を言ったかという、自分はある程度できる。でもみんなもうまくなって楽しくハンドボールができるようになりたいから、僕はきょうは緩やかにプレイするこのグループに入って、教えながらゲームをしたいと言ってきたそうです。

逆に、余りボール操作は得意ではない女子生徒が、きょうはがんがんやるチームに入ってやると言ってきたそうです。どうしてと聞いたら、私、ボール操作はうまくないけれども、いいところに走れる、動きはわかる。だからそういう中で、自分が動いたことがどうなるのか、走ったらパスが来るのか、いいところにいたらパスがもらえて、シュートチャンスになるのかゲームの中で試してみたいと言っていたそうです。「目標に準拠した評価」を進めていく中で、指導したことの出来栄を適切にフィードバックしていくことで、生徒は自分の状況を把握することできるので、自分たちで主体的に考え、選択していく子たちに育っていくんだと、思い出してお話させていただきま

した。

佐藤 若先生（高等学校）

高校の球技では、生徒ができる、できないにかかわらず、メインゲーム中心になりがちな授業が多かったように思いますが、現行の改訂では、学習内容に沿ったタスクゲームがセッティングされるようになり、それぞれの技能を高めたり、「思考・判断」できるような授業に変わってきたのではないかなと思っています。例えばバスケットボールでは技能の高い生徒が三人いますが、あまり運動が得意でない生徒でも、自分がどこに動けば良いのがわかるようになり、考えて動くことができるようになったことで、ゲームに生かせる力を身に付けられるようになったと感じました。

下橋 良平先生（小学校）

球技の話題になっていますが、小学校は発問の研究というのがそこに入ってきたように思います。ボールをもらってチャンスを生かして得点するにはどこに

行ったらいいかなど、単元の前半で評価規準に沿った内容について子供に気付かせる発問として提示し、子供たちが身に付けた知識をもとに技能として発揮しているかを単元の後半につなげていくという流れがあったと思います。

小学校では、発問の研究がこれまででは弱かったと思いますけれども、この十年で子供たちに何を気付かせたいか、何を身に付けさせていきたいのかというのを、教師も意図的に発問し、子供たちに課題をもたせ、課題を解決していくプロセスで子供たちが身に付けたことを技能として発揮する、そういう授業スタイルが増えてきている実情があると思います。

岡出理事長

今、ご指摘いただいたようなことを踏まえて授業のシーンを考えると、例えば最初にきょうの授業のねらいを先生がきちんと説明し、そして授業の最後にはきょう取り組んだことに対して、君たちはこういうことができたよね、こういうところが課題

として残ったよねと先生が評価する。あるいは生徒が自分たちのできた、できないということに関して、自己評価、友達からの評価を受けるとか、そういうシーンが通常の授業の中でごく普通に見られるようになってきたのかなという印象はあるんです。

現在は、きょうのねらいが示されたり、単元の学習の見通しが説明されたりといったことが行われ、自分たちに何が求められているのかというのを、子供も理解しやすいような授業のスタイルになってきていると思います。

現行の学習指導要領のもとで、「目標に準拠した評価」に基づいて授業の計画を立てる、それを実行して授業を評価していくことが進められてきたという話でした。大切なのは、こうしたことが次にどう生きるかということだと思えます。

新学習指導要領の観点別評価の観点については、「知識・技能」「思考・判断・表現」、それから「主体的に学習に取り組む態度」と、三つになったわけ

ですね。現行では保健体育は四つでした。今回、指導内容の柱と基本的に対応させるような形になったことは、教員にとっては今までよりはわかりやすくなるのかなと思います。今までです

と、「態度」というのに「技能」から考えると、クロスするところがたくさんあって、どう判断するのかよくわからなかったところが、要領の記述と評価の観点が対応してわかりやすくなったとは思えます。今後、新学習指導要領を踏まえて実践する授業というのは、どんなことができそうなのか、あるいはこんなことはどうも不安なんだと感じておられるのか、そうしたことについて少しご紹介いただければと思うんですがいかがですか。

下橋 良平先生（小学校）

「知識・技能」に関していうと、小学校はこれまで知識については評価していなかったのですが、これは新しい取組になります。技能と関連付けてどう評価していくかというところが視点になるかと思えます。専門性の高い

教員ばかりではない小学校からすると、知識が入ったことによつて、今まで運動ができるイコール体育の評価が高いというところがあつたこと、それが大きく変わると考えています。

もちろん知識の内容を、これまでも教員は課題解決の学習の中で提示してきている授業が多かつたわけですが、授業展開の中で、学習指導要領でいわれる「行い方を理解している」ための前提として、先ほど申し上げた子供たちに発問で気付かせて、知識として身に付けさせている。そうして身に付けたものを、これからどうやって評価していくのというところが、先生方の議論になっていくところだと思います。

実際には、学習カードの表記であるとか、子供への問いかけのようなもので評価していくと思います。小学校が中高と大きく異なるのは、ペーパーテストは一切、体育では行わないため、授業の中でその知識の部分をどうやって見取るかというのがこれからの議論の核の一つになるかと思っています。

藤 至光先生（中学校）

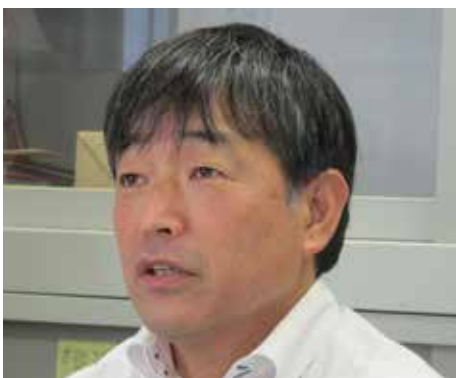
今の話に関連しますが、中学校では今まで別観点だった「知識」と「技能」が一つの観点になったことが課題となつてきています。知識は知識、技能は技能で判断してきたものを、それぞれを確認しながらどう合わせ

て一つの観点として判断していくかというところが、先生たちが悩むところだと思います。わかつてできる、できるからわかつていけるというような関係性が一番望ましい姿なのではないかと思つているところです。知つていだけでできない、できるけれどもも合理的な動きについては理解していないというところはどうやって一致させていくかというところが、これからの指導

と評価の中では大事になつてくると今は思っています。

三観点になつたというのは、「資質・能力」の三つの柱と対応してということですが、この観点の並び、順序が気になるところではあります。知識偏重ではなくというところから、現行では「知識・理解」が四番目にあつたと認識しているんですが、今回の表記だと、最初に「知識・技能」を示しているのはどういう意味があるのでしょうか。三つの柱との関係性だとは思いますが、やはりこれが大事なのかという見え方をしてしまうかなと、思っているところなんです。

あとは、「資質・能力」と評価の観点が全教科同じになつたというところで、体育・保健体育としてはどのように「見方、考え方」を働かせるのか、そしてどのように「資質・能力」を育んでいき、評価していくのかというのは、すごく難しいというか、大きなテーマなのかなと思つているところです。



佐藤 若先生（高等学校）

今、中学校からお話しいただいた、わかるとできるの関係ですが、特に高校生になると、わかつていくけれども、少しづつ体が動かなくなっていく、特に女子は、わかつて意欲はあるが、自分の体をうまくコントロールできなくなるといふ時期にも差しかつてきます。今まではそれを知識と技能にわけていたわけですが、同じカテゴリーの中でも行い方を理解し、わかるとできるが、それぞれ評価できるようなになればよいと思つています。そしてわかつたことを何回も繰り返し練習しながら身に付けていくという過程を生徒たちに指導していきたいと思つています。

限定しているわけですね。中学校・高校に関しては、運動観察の仕方とか、歴史のことだとか、そういうものも生徒たちに教えてくたさいという示し方になっているので、中・高の場合は、指導内容との関係があると思うんです。

そうすると、技能と直接かわりのある評価と、そうでない内容についての評価ではどのようにすればいいんですかという話になってしまふと思うんです。今までも「理解している」という評価規準ですと、「何々について書き出している」などの文言を入れて確認できる場面を作つていたんですよね。

そのように考えると、今言つた二つの知識の違いから考えて、評価の仕方を変える必要があるのでしょうか。自分たちの学生時代は、歴史やルールなどはペーパーテストによつて知識を見ていた。でも実技では実技で評価しているので、その場面で知識のテストをされたという感覚はないです。

今、「知識・技能」についてお話をいただいたんですけれども、最初にお話ししたように、小学校の知識に関しては、行い方に

現行でも、今言つた二つの知識は入っています。それを引き

継ぐ形で、今回新しい要領が、「知識・技能」という形になったときに、評価の仕方は、先生方からするとこのように変える必要があるとか、いや変える必要ないんだとか、そういうところはどうかとらえていますか。それは、小学校の先生方にも参考になるような気はするんですけれども。

佐藤 若先生（高等学校）

技能に関する行い方の知識については、学習カードなどで見取り、学習したことをその時間に評価していくことは変わらないのではないかと思います。知識を活用して技能を身に付けることができるように行つていけばいいのかなと思つています。

技能に関する知識の他には、課題解決の方法、体力の高め方、発表の仕方がありますが、その単元だけではなく、他の単元でも汎用的な力として発揮することができればと思います。

藤 至光先生（中学校）

中学校も定期テスト、いわゆるペーパーテストで運動の合理的な行い方を知っているかとか、課題解決のための方法を知っているかとか、具体的にどのようなことをすると課題解決につながるのかというようなことは問いますし、もちろん学習した歴史に関することや、体力の高め方というのも出題しながら、子供たちの知識を内容のまとめりと共に確認していくことをしていました。

しかしながら、授業の中で見取つて知識として判断してきたものもあるので、そうすると授業中の見取りでは、ちよつと足りないところがあつたのかなと思います。運動技能にかかわる行い方の知識は、実際の動きの中で見ることができるかもしれないけれども、歴史や体力の高め方は、授業中の生徒の動きではわからないと思います。それらをどう見取つていくのか、それが定期テストのようなペーパーテストが望ましいのか、またはその単元のまとめりごとという考えであれば、単元の終了時に、単元のまとめをしないうような方法もあるのではない

かと思つています。

吉原理事

今のお話を伺つていて、確かに技能にかかわる知識の部分と、単独としての知識の両方があると思います。ですから、「知識・技能」という一つの観点でありながら、同様に技能を技能だけで見ていく場面もあるのかもしれないし、知識と技能を絡めて見ていく場面もあるのかもしれないと感じています。

知識だけを見ると、運動の歴史や特性、それからルールやゲームの進め方・行い方とか、こういったものは今までも中高では知識として単独で扱ってきた内容だつたと思うんですね。ですから、それが技能と一緒になつたときにどうまとめていくかというのが、これから先生たちが考えていかなければいけない大変なところなのかなと思つています。この「知識・技能」については、授業計画や指導内容をきちんと整理して評価につなげるのが大切だと思います。

岡出理事長

一つ例をお示しします。一九八〇年代、ドイツの高校で、体育理論の授業で実技をやらせていたケースです。ルールが変わった、なぜ変わったんだろうということを追体験させるといって授業なんです。

そこで取り上げられているのはドイツで作られたバレーボールみたいなもので、両方のコートで何回ネットを行き来したかという、これを二つのチームで共同で何点とれるかやりましようというゲームがあつたんです。そうした時、ナチス・ドイツが台頭してくると、相手が失点するようなルールにどんどん変わってきまして。みんな協力して仲よくやろうねというルールが、相手をたたきのめすというルールに変わっていくんです。作つた人たちは、そういう意図でつくつたのではないので、止めようとしたんですけれども、やっているのは作つた人たちが思っていたことと全然別ですよ。それを高校生に、これは何年のルール、これは何年のルールと教員が示して、生徒

たちに「このルールでやるとどんな感じがする？」と聞くと、たたきのめす系統に慣れている子供たちからすると、「何で昔の人はこんなかつたらいことをやっていったんだろう」という考えになったりするわけです。

体育理論の授業で、同じ種目を別バージョンでして、ゲームをやる人とゲームのルールを作る人のグループにわけで行うというものがありません。やる人たちのグループは、ルールをつくる人グループが提示するルールでゲームやりなさいと要求される。見ている人たちがおもしろいと思うルールを、やる人たちが強要されるわけです。すると、自分たちはここを楽しくやっているのに、何でこんなルールでやるんだ、おもしろくなくなっているんだけどということが生じてくる。ところが、ルールを作つた人たちは、それがおもしろくなると思つているので、何でそう思うのかなというようになるわけです。こういう授業のやり方を日本でも紹介して、それを追体験させようとした人たちがいたんで

す。そうすると、何が起るかというと、技術がないとルールを使いこなせない。ルールを使いこなそうとすると、そのルールで規定されている課題をきちんとクリアできる技能をもっていないと、そのルールは生きないんですよ。

ルールが変わるといふのはなぜ変わるんだろうとか、そのの意味は何だろうとか、そういうことを考えさせる体育理論の授業で、知識の理解度をどのように深めていくのかということを試行したような授業だったわけです。授業の展開の仕方としては。そういう場面を設定して、最後にレポートを書かせて、それをみんなの前で発表させるわけです。

ここで次の「思考・判断・表現」の観点について考えたいと思います。

この「思考・判断・表現」、課題を見つけるとか、課題の解決方法を見つけるとか、そういうことが出てきますね。これは知識がなくて課題が見つけれられるのかと、そういう問題が多分出てくると思うんです。そういっ

た視点からすると、この「思考・判断」に「表現」が加わったことから、授業がどのように変わっていくのか、あるいはどうするんだろうかよくわからない、といった不安についてご紹介していただければと思います。

下橋 良平先生（小学校）

「思考・判断・表現」については、「表現」が入ってきたということで、小学校でこの先想定されるのは、課題発見の場面が必ずどの単元でも取り上げられるようになるだろうと思っています。

先ほど話にあつた「知識」は、小学校はこれまで「思考・判断」の中に入っていましたので、教師が提示したり、この十年の後半では、子供に気付かせたりということをやってきました。これからは、子供たちに課題発見をさせて、自分たちの何が課題なのか、この運動をどうやってできるようになるのかということ、知識として子供たちが身に付ける。それを課題解決で「思考・判断」していき、「表現」するということになると考えま

す。しかし小学校では、発達段階も踏まえて、なかなか自分を出出できない、自分が考えたことを文字や言葉で伝えられないという子供たちもいます。その子たちの「表現する」というのをどう見取っていくかということと、これまでも学習カードで「思考・判断」を評価するところがあったことが、新学習指導要領には「伝え合う」という言葉が小学校に入ってきているように、例えばボール運動で自分たちのチームの特徴を分析した作戦を、言葉で伝え合うことについても、教員が意図して評価していかなければならぬということが課題であると考えています。

藤 至光先生（中学校）

今までも「思考力・判断力」を育成していくというのはありましたから、中学校では各学校の生徒の実態に応じた学習カードを活用して、子供たちが自分の状況を確認しながら計画を立てて課題解決に向かっているという授業をしていくことは、これから必要だろうと思ってい



り組むことが大事だと気付いてもらわなければならないと思っています。

また「表現」については、今までもアドバイスとか、友達の様子を見て伝えるというのはやっていたので、改めて「表現」が加わっても対応できると思います。子供が考えていることを他者に伝える、それが言葉なのか、書いてなのか、絵でもいいだろうしということ、何とか表現できる方策を子供の実態に合わせて考えていく必要があるということ、学習活動の中で、場面を意図的に位置付けられないといけないとも考えます。活動中や授業のまとめの場面で、「伝える」「聞く」といった活動ができるようにしていくと、子供たちが自分の課題を解決するための学習の時間の保障もできると思います。こうした授業の流れを作っていくことで、子供たちも自分だけでなく、一緒に学習する仲間がいて、意識しながら学習に取り組んでいく、協働的な学びを先生が構築することが大事になってくるんじゃないかなと考えています。

そういう時に、自分の状況を把握して、最終的に何時間の授業の中でどこまでできるようにしたいという見通しをもちながら試行錯誤していくことが出来る授業にしていけることが大切だと思いますし、先生方がそういう授業をデザインできるかどうかというのが、大きなポイントになると思います。

時間数の関係もあり、基本的なことを中心にしてみました、身に付けさせたいと思う事ばかりに取り組ませたり、あるいは最後まで一斉授業だったり、教師からの指示ばかりになってしまったというのも課題としてはあると思います。生徒が自分のめあてをもって課題解決に取

佐藤 若先生（高等学校）

何の活動もセッティングしないところで「思考力・判断力・表現力」を育成しようというのは、生徒に対して無茶なオーダーだなと思っています。この時間にこのようにしたいという活動計画を立てる中で、こうした能力を育成していくことを明確にすることが大事なんだろうなと思いました。特に「表現」が入りましたが、今まで私も学習カード記入のみの時間もありませんでしたが、みんなの前で説明する時間を設けたり、この時間はバディでそれぞれアドバイスする時間を設ける、そのための時間を確保して、確実にそういった活動ができるような状況を保障することによって、育てたい能力が高まっていくと感じています。それを何回か繰り返すと、生徒はすごく上手になります。最初はもどかしくて言葉が出てこない生徒も、そういう場面で回数を重ねることによって自分の思っていることを伝えられるような成長が見られるようになります。

岡出理事長

「思考・判断・表現」について、課題を見つけて、解決方法を見つけるといったことが適切であつたかに関して、まず子供たち自身が振り返り、考えたことがよかったかどうかを自分で評価する。その時に自分が判断したことがよかったかどうか誰からもフィードバックされない、というものの考え方をしたいのかよくわからない状態で進んでしまう可能性があると思うんですよ。なので、学習したことを人に話してみると、自分が考えていなかったことが見えてくるので、「表現」が加わることは、「思考・判断」がきちんとできていくようになる上でも大事なことだとは思っていますね。

他方で「主体的に学習に取り組む態度」と「思考・判断」は何が違うんでしょうとなると、そこはグレーゾーンに見えてしまいうような印象はあるんですよ。「主体的に学習に取り組む態度」は、今までは「愛好的態度」と言われていた一面があるんですね。運動が好きといった意味で

の態度。でも、この「主体的に学習に取り組む態度」と示された内容はそれだけじゃないというのが、観点の表記ですね。

大事なことは、自分の学習を鳥瞰図的にメタ認知しながら、学習をきちんと調整をしていくという、こういうことが求められているということで、これなかなかハードル高いなと思うんです。そうしたときに、「思考・判断」と「主体的に学習に取り組む態度」は何が違うんでしょうとか、評価の仕方とかで気をつけないといけないこととか、先生方のイメージというのはどんなものですか。

下橋 良平先生（小学校）

小学校はこれまで、課題解決の学習、めあて学習と言っていたときもありますけれども、かなり盛んにやっていたと思います。そう意味では今回、「主体的に学習に取り組む態度」については、体育は指導内容として示されているので、「学びに向かう力・人間性」の内容に対する評価をしていくことになりますが、この観点の考え方のベースにも

なっている、自己の学習を調整

していくという部分は、これまでの「思考・判断」でやってきた部分であろうと思います。

知識を活用して自分たちが必要を感じた課題を解決していくプロセスというところが「思考・判断」で、「主体的に学習に取り組む態度」は、そのプロセスが一致しているかどうかというところにかかわってくるんだと思います。課題やめあてと解決策、その解決した結果、振り返り、自分のフィードバック、自己評価というのが、今までで言うスパイラルの部分で、いかにこのスパイラルがしつかりできているかというところは、自ら学習を調整しようとする事で評価できるところ。それに対して、粘り強く自分の課題、何度何度も同じ課題になるのかもしれないし、また新たな課題を担うかもしれないというところに対して、粘り強く学習に取り組んでいるかという、こういった視点で考えると、学習指導要領に「学びに向かう力・人間性」として示した指導内容を評価していくことが、小学校では大切

になると考えています。

藤 至光先生(中学校)

きれいにすみわけができるのかというところはあるんですけども、今まで「主体的に学習に取り組む態度」の中の「主体的」に必要なキーワードとしては、見通しをもっているかどうか、振り返りの活動を通して、次に何をしようか、自分事として学習に向かえているかどうかというところだと思います。いろいろな態度が示されているので、この見通し、振り返りだけではない、先ほど話にあったアドバイスをする場面で、協働するとか、話し合いに参画するとかという態度も含めた、授業全体の中で子供たちが見せてくれるパフォーマンスが「主体的に学習に取り組む態度」として見えてくるものかなと思ってるところです。

佐藤 若先生(高等学校)

とても難しい質問だと思いますが、「主体的に学習に取り組む態度」には、具体的な内容として公正・協力・責任・参画があ

ります。

岡出理事長

共生とか。

佐藤 若先生(高等学校)

そうですね、共生がありますよね。明確にならないのですが、それをしようとするのが態度の評価で、それに対して考えたり、アドバイスしたりする内容を評価するのが「思考・判断・表現」なのかと思います。すみわけはものすごく難しいですが、今のところはそんな整理しかできないです。

岡出理事長

評価の枠組み、観点が変わると、授業の仕方も変わっていくところがあると思うんですよ。例えば観点別評価の観点がありますよね。「知識・技能」を例えれば全体の一〇%でしか評価しません。「思考・判断・表現」は八〇%で評価します。「主体的に学習に取り組む態度」は一〇%にしますとか、これで一応一〇〇%になりますよね。もしそれで授業をするかどうかという

現象が起こるかという話になると、技能を高めても余り意味がないよねといった現象が起こると思うんです。

実際に見た高校の授業で、先生方が単元の最初に、ボールを遠くに投げるとはどういうことをやればいいんだろうと、こういうテーマで一学期間やるからと説明したわけです。それは体育理論と実技と併せた形で単元を作ってやりますと、観点別のパーセンテージも示したわけです。そうすると、技能の位置付けがかなり低くなったために、それまで自分たちは能力が高いと思っていた子たちは、レポートの内容が良くなかったために、成績が低くなってしまった。またそんなに技能は高くなかったんだけれども、いろんなことを考えながら、自分の課題をしっかりと解決する方法を表現できる子供たちは一気に評価が高くなって、授業に対する取組が全然変わってしまった。みんなが一生懸命授業に取り組むようになりましてという話があるんです。

そういう意味で、たかが観点、

されど観点みたいなところがあって、先生方の授業の仕方とか、あるいは子供たちの授業に対する取組方をかなり変えていってしまう可能性もないわけではないと思うんですよ。

今、この「主体的に学習に取り組む態度」、これは示されている文書で言えば、「資質・能力」の「学びに向かう力・人間性」の人間性に関しては、そのまま判断していいかというのは疑問だと思うんですよ。「感性・思いやり」という書かれ方をしていますが、そこには指導する内容があるというコンセプトは多分ないと思うんですよ。でも他方で、体育というのは他の教科と違って、そこを指導する内容がありますよと明示された一つの教科であって、おのおのの教科で色を出しているという文書は残っているわけですよ。

そうすると、「学びに向かう力・人間性」のその「人間性」は、これ評価するんですか、しないんですか、これはどこにも明示されていないわけですよ。それは「感性・思いやり」の問題ですよと言われるので、「評

価・評価」の対象にはならない

んですよねとなりますよね。教員からすると、その評定と評価と言われているものは、実質評定のことでしょうと思われる方がたくさんおられると思うんですよ。そうすると、指導する内容があつて指導したのに、それは評価しないんですかという話と、評定の話か評価の話かよくわかりませんといった混乱をし、今の段階でやきもきされている人たちが結構いるような気はするんですけども。

小学校では、もう来年四月から新要領で動き出してしまうわけですから、始まるときにその方針が出ていないと、一学期の通知表をどうつけるんですかといった、そういう話になってしましますよね。そういう意味では、指導内容としての人間性にかかわるようなところと、今話をした「主体的に取り組む態度」と言われるその評価の観点との関係について、皆さんが困るのではないかと、あるいはこう考えると解決するのではないかなど、思っておられることが何かあります。

下橋 良平先生（小学校）

小学校の体育科からすると、小学校の体育は学級担任がやるので、この「感性・思いやり」、「人間性」の部分は、これまでの小学校体育の学習の基盤というか、真髓みたいなところが実はあります。小学校の教員は、この人間性については、これまで相当重視して、かわり合いの研究にも取り組んできました。評定にかかわる「主体的に学習に取り組む態度」から外れて、個人内評価という形で示されていますが、あくまでも体育の学習のベース、基盤として、これから小学校教員からすると、学級経営へ直結することから、小学校体育の根幹をなすものとして、継続していくことになるかと考えています。

吉原理事

この「主体的に学習に取り組む態度」というのは、「知識・技能」を身に付けるためにも、「思考・判断・表現」を身に付けるためにも、思考・判断・表現」を身に付けるためにも必要になる、基盤となる力なんだと思っているんです。ですから、そこが今までの「関

心・意欲・態度」、単なる関心や意欲、態度ではない。例えば保健体育の学習を進める上で大切となる、学習の意味とか、自分たちを高めていく価値付けとか、技能でできるようにしたいという思いとか、仲間とのかかわり合いで得た喜びとか、楽しさとかというものを味わうための基盤となるのではないでしょうか。よりよく学ぼうとするためにこういった意識をもたせることが重要なのだと考えます。そのベースとして、三観点の最後に、この「主体的に学習に取り組む態度」が示されている感じがします。

「知識・技能」「思考・判断・表現」と示して、それを支える意味で「主体的に学習に取り組む態度」となる。かなり幅広いとらえとしてこの「主体的に学習に取り組む態度」が示されているという印象です。ですから、自己調整とか粘り強さみたいなものが出てきているのは、最終的に自分を高めていくために、よりよく学ぶために仲間とどのように関わっていくのかというようなことも含めて示している

と考えます。

藤 至光先生（中学校）

「主体的に学習に取り組む態度」が土台として支えていて、それぞれ関連付けながら子供たちがよりよくなっていく感じで

すね。そういう表し方になっていると捉えると、「知識・技能」を習得して、それらを活用する力も身に付けながら、学びの土台となっている「主体的に学習に取り組む態度」も併せて伸びていっているというイメージな



んですかね。

佐藤 若先生（高等学校）

人間性を教えるということは、道徳とかでもかかわってくると思います。体育で教えるとなると、「主体的に学習に取り組む態度」は目標も学習内容も全部含まれているのですから、とても大事な内容だと思っています。

「評価・評定」ともかかわってくる内容で、それを少し度外視すると、高校生に教えるときは、協力しようと直接言っても、なかなか難しいので、なぜそういうことが大事なのかという基礎知識などを伝える必要があるのではないかと思います。これから社会に出ていく子供たちが、スポーツを通して学んでいく上で、なぜそれが大事なのかを理解することで、育成できるのではないかなと思います。

岡出理事長

話を投げかけた理由はあって、今回、「資質・能力」の三つの柱をもとに、各教科全部それに従ってその指導内容の構成をし

ましようということになったわけです。「学びに向かう力・人間性」と言われるところで、全部の教科がそれをきちんと育成する、しかしながら、「学びに向かう力・人間性」は、「育成」とは書いていなくて、「涵養」と書いてあるんです。そして、「生きて働く知識・技能」の「習得」なんです。「思考力・判断力・表現力等」の「育成」なんです。

最後の動詞の表現が違っているんですけども、どの教科も「学びに向かう力・人間性」と言われているものは、目標のレベルでは書いてあるわけですね。

この三つのトライアングルをきちんと守れと言われたときには、「主体的・対話的で深い学び」のことがかりが目につきましたけれども、実は何を学ぶのかということが示されていたんです。ということは、この「資質・能力」を育てるには、それに対応した学ぶ内容があって、それを習得させるためには、より適切なやり方があるって、この三つの関係の整合性を図らないと成果は出ないですね、それをきちんと取り組んでいるかどうか

かは、その評価を通してチェックしていきましょねと、こういう枠組みでスタートしているはずだと思うんですよ。

ところが、「学びに向かう力・人間性」と言われるものは、何を学習すると涵養されていくんですかという話になるとよくわからないぞという話が出てくることと、今、道徳の話もあったんですけども、それは価値観の問題だから立ち入れないよねという話が出ますよねといったこともある。

そういう意味では、指導をする内容があれば、それをきちんと学習できているかどうかということを評価するのは、「指導と評価の一体化」という話から避けて通ってはいけないことだと思うんです。

先ほど協働というお話がありましたよね。例えば二人でペアになって話し合っところ、きょうお互いによかったところを褒め合っところと言ったときに、やらないケースが必ず発生します。理由は二つあるんです。一つは、そのことに価値を見出していない。そんなことを

やっても意味ないよねと思っっている子は話し合いに乗らない。二つ目は、やり方がわからない。話し合っところと言われたけれども、何を話したらいいんですか、どういうふうに話したらいいんですか、とやり方が理解できていない。協同学習では、社会的なスキルと言われるものになる。

意図的に協同学習を進めようとするならば、聞き方とか、話し方とか、そういうことをきちんと学ばせておく必要がある。

そういうことも踏まえて、子供たちを育てていくことが大切だと思います。それは、人格評価しているわけではなくて、指導したことを評価していくという一貫性の中で、授業をどのように構成していくのかということを考えないといけないと思うんです。

小学校は来年から始まるわけ、今後は実施体制を検討したり、どのような視点を大事にして授業を変えていけばいいのかを考えたりしなくてはいけません。そうした中で、今までの取組も財産としては残さな

いといけないものがありますし、あるいは、これをもうちよつと足していく必要があるだろうとか、そんなこと等をご紹介いただければと思うんですけれども、いかがでしょうか。

藤 至光先生（中学校）

「資質・能力」の三つの柱の整理とそれに基づいた三つの観点というのを出されましたが、今までやってきた子供たちの学習の基盤である言語能力や、情報活用能力、問題解決能力というのは、これからの教科でも意識しながら高めていかなければいけないと思います。きょうの話の中でも問題を解決する能力とか、三つの「資質・能力」の育成を目指すための要素は、授業の中にいつも散りばめられていると思っています。

改めて「目標に準拠した評価」ということを踏まえて、きちんと単元の目標と評価規準を明確にして、子供たちにも伝えていくということを大事にしたいです。そして子供たちが自分の状況がわかって何を身に付けていきたいかということを明確にし

ながら授業に取り組んでいく中で、仲間と協働しながら課題解決に向かっていくということ、振り返りを通して次の課題を設定したり、次の見通しもったりしながら、子供たち同士で考えていることをお互いに伝え合っていくというのは継続して取り組むべきことと考えます。それを先生方には改めて理解してもらいたいということ、立場的にはそれをきちんとわかりやすく発信していかなくてはいいと思います。

きょう話をお聞きして、再認識したこともあったので、先生方にわかりやすく伝えられようにしたいと思いました。今お話にしたことを大切にしながら、新しい学習指導要領で求められている「資質・能力」を育むために、自分はどうやって授業改善をしていくかということに視点を当てて、授業を振り返ってもらうことが大事なのかなと思います。先生方一人一人がよりよい体育・保健体育の授業を構築すること、子供たちが自分の力を伸ばすとともに仲間と関わりながら取り組むことで、

楽しいスポーツライフが実現できるのではないかなと思っておりますし、そういう期待感を今もっています。

佐藤 若先生（高等学校）

やはりゴールイメージを教師がもつこと、生徒たちにどういう力をいつどのように身に付けてさせるかというイメージをもつて指導していくことが大切だと思います。さらに、これまでの授業でも取り組んできたけれども、さらに質を高めた授業を実践する。そのために三つの観点をもとに、成長過程に合わせた状況を教師が見取ってすぐ生徒にフィードバックする。単元の最後にこうだよと返すのでは、「資質・能力」を育てることはできないので、身に付いていないのであれば、そこに対して教師が指摘していくことで、生徒もどうしたら力を伸ばしていけるのかの目標イメージが出来ると思います。指導し確実に評価をしていくことで、さらに質の高いものができてくるのではないかなと思います。

下橋 良平先生（小学校）

小学校は待ったなしの状況です。現場の先生方からも、具体的な評価の考え方を早く示してくれと言われます。我々も国研からの資料を待っているんだというやりとりをしている状況ではあります。

これから来年度に向けて、小学校の体育としてこの三つの柱をバランスよく評価していくということは、変わらないだろうと思っています。ただ、先ほども申し上げましたが、これまでの「技能」ができる児童に対して「態度」も「思考・判断」も高い評価になってしまいう傾向がありました。しかし、あくまで技能も知識とセットになった観点の一つであることを踏まえて、バランスよく評価を行う意識が大切になると思っています。

評価計画については、運動領域にもありますが、これまで「態度」を先に見て、「思考・判断」を見て、最後に「技能」を見るという重点の置き方が多かったように思います。来年度以降に関しましては、「主体的に学習に取り組む態度」は、ずっと単元全体

を通して見なくてはいけないだろうと考えています。その中で、「知識」をいつ見るの、「技能」をいつ見るの、「思考・判断・表現」をいつ見るのというように評価の視点が変わってくるところだろうと考えています。それは、自ら学習を調整して、粘り強く学習に取り組んでいる姿をある一時間、二時間を重点的に見ただけでは無理で、感性や思いやりを含めて単元全体を通して見ていかないといけないと思いますので、その点は評価の考え方でも変わってくるところだろうと考えています。

岡出理事長

指導要領とは何ですかという話になると、日本中どこで学んでも、きちんと教えてもらえますよと書いた文書が指導要領だとなります。要領は十年に一回程度、日本は変えるわけですね。それは、指導要領で学んで、子どもたちにどのような力がつたのか、またはつかなかったのか、そういうことを評価するために学習評価というのがなされていて、その精度が高まると、

次の指導要領がより子供たちの実態に添ったものになるというわけです。

そこには、先生方が日頃取り組まれている授業の成果が反映されるということだと思うんです。先生方が力を入れてやってもたどり着けないゴールが設定されていると、それは先生方の問題ではないですよね、高過ぎる要求だと。時間数とか、施設条件を考えてもこれは無理だろうというものもあると思います。国としては、何年か先を見越して、こういう能力を身に付けさせたいと考えてそこをゴールにするけど、子供たちが実現できる条件整備が完全に整えられているわけではない。

今、経験の少ない先生が増えて年配の先生が一気に退職していく。それはこれまで想定していなかった教員の年齢構成だと思えます。それなりにバランスよく教員構成ができていて、先輩が後輩に伝えていって、中堅が若手に伝えて、学校内で育て上げていくという、そういう条件のもとで展開されていたものが、条件が変わってくると達成

できなくなるものとかが出てきますよね。そういうことを考えていくと、最低限みんな同じような共通理解を学校ベースでもって、それでやっていきましよう、それでもうまくいかない場合は、改善策をみんなでアイデアを出し合って取り組んでいきましょう、そういう授業改善に向かう学習評価を、改めて考え直すような、そういう機会にもなるのではないかと思うんです。

小学校の先生方は、これまで相当苦勞していると思うんですよ。というのは、評価の観点が教科によって違っていたりするので困ってしまう。逆に言うと、

いろんな教科を見てきているわけですね。中学校や高校の先生方は、他教科の人たちがどのようなに見ているか、余り知らなくとも今まではやってこられました。しかし、今回観点が一緒になったわけですので、同じ土俵で中学校、高校の先生方も、他教科の先生方と話す機会が多くなると思います。そうすると、学校の中でゴールに向けてどうやってみんな協力しましょう

か、ということも言いやすい環境にはなってくるので、体育としては「こういうことできるんですけれども他の教科はどうですか」という話ができるようになってくることで、学校が変わっていく可能性も高い。小学校では、同じ観点で全教科見られるので、今までは違い、

シンプルに子供の姿を見られるようになって、それが子供たちに成果として現れるようになっていけば、次のステップがまた開けるのかなと思います。そんな印象を、お話をうかがいながら感じていました。

最後になりますが、言い忘れたこととか、もう少し言っておきたかったことがあれば、補足していただきたいと思います。

藤 至光先生（中学校）

先ほど下橋先生の話を聞いて、三つの「資質・能力」をバランスよく育成していくというのは、すごく大きなキーワードで、それは体育だけではなくて、全ての教科で進めていくわけですから、それが岡出先生がおっしゃった、学校としてどこを目

指していくのかというのにつながり、体育・保健体育として重点化すべきポイントを確認していくことにつながっていくのかと改めて感じました。

保健体育の授業を通して、あなたは何が身に付いたのと子供に聞いたときに、これがうまくできるようになりました、こういうことを知りましたと返ってくるだけではだめなのではないかと思いました。できなかったことがあったんだけど、友達と協力してやっているうちに、くじけないで粘り強く取り組むことで、できるようになるんだということがわかったとか、仲間と協働して進めると、自分ができるなかったことを仲間に見てもらえるから、改善しやすくなることがわかったなどと、答えてくれる子どもたちを育てていくことが大事なんだと気付きました。

そうすると、やはり変えていかなくてはいけないのは、我々の意識だと思います。体育・保健体育を含めどの教科等も、育成を目指す「資質・能力」と観点が一緒になったことで、体育・

保健体育としての「見方・考え方」を働かせて授業を進めていくためにはどうしたらいいんだという視点を明確にもたないと、体育・保健体育の価値が問われてしまうという怖さも少し感じました。

下橋 良平先生（小学校）

来年四月以降の授業に直接つながるかというところなんですけれども、今回の学習指導要領に立ち戻ったときに、運動が苦手な児童への配慮というのが示されていることは、とても大きいと考えています。この十年、小学校教員はどちらかというと、運動がすごくできる、有感覚を味わっている子たちよりも、運動がちよつと苦手な児童に対して、できるようにならうよとか、もうちよつとかかわらうよという手だてをすごく一生懸命考えてきました。

一昔前に、「マイスタート・マイゴール」という考え方がありました。新しい学習指導要領では、もしかしたらまたスポットライトを浴びるかもしれない。将来の体育の授業像を考えて

いったときに、より学びが多様化してくるでしょうし、個別最適化と言われる言葉も聞かれるようになってきているように、その子その子に応じた課題解決の仕方というのをこちらが授業設計して構築していくことが求められると考えると、この「マイスタート・マイゴール」の考え方というのは、来年の四月以降、いろんな学校の授業場面で見られるようになるんだろうなと思っているところです。

佐藤 若先生（高等学校）

この評価の話というのは、「指導ありき、指導をしつかりすること」が評価につながり、それが「資質・能力」につながっていくということを改めて感じました。教師が学んでいかなければいけないということですが、何のための評価かといったら、生徒が評価を通して自分自身がどう頑張っていきたいのかを振り返ること、そして教師が自分の指導について振り返り、見直すことです。生徒たちも、大学や評定とすぐ考えてしまうこともあるんですが、自分に必要な

評価であることを、教師は忘れてはいけな

菅原事務局長

ては、いけないと改めて感じたところ

お話をお聞きしながら感じたことがあ

そして、先生方が大変な思いをしているな

りです。体育を通してスポーツの楽しさを

一つ目は、岡出先生からお話があった、指導したことを評価

力を見て育成を図っていく、バランスよくと言

岡出理事長

長時間にわたり、多面的にまた熱心にご意見を

また見えるものであったりというようなものを評価する

最後に、体育・保健体育の理論構築、実践を行

ただける、あるいは知っていただけると、子供たちにとつ

二つ目は、「すみわけ」という言葉から、最終的には「主体的に学習に取り組む態度」

もこんなに難しいのに、これから新しく先生になる方

吉原理事

熱心にお話し合いいただきました。ありがとうございます。

「知識・技能」は習得する、「思考力・判断力・表現力」は育成

「人間性」には涵養するという、このように育み方の難し

いそれぞれあるということ。

全国学校体育研究大会 近年度開催地のご案内

第58回全国学校体育研究大会（令和元年度）開催地	埼玉県	令和元年10月31日・11月1日
第59回全国学校体育研究大会（令和2年度）開催地	福井県	令和2年11月12・13日
第60回全国学校体育研究大会（令和3年度）開催地	愛媛県	令和3年11月11・12日
第61回全国学校体育研究大会（令和4年度）開催地	滋賀県	
第62回全国学校体育研究大会（令和5年度）開催地	山形県	
第63回全国学校体育研究大会（令和6年度）開催地	山口県	
第64回全国学校体育研究大会（令和7年度）開催地	北海道	

第五十七回 全国学校体育研究大会 佐賀大会を終えて

佐賀大会実行委員会 会長 中島 慎一



の皆様に見ていただきたいという思いで準備を進めて参りました。

晩秋の佐賀平野で開催しました第五十七回全国学校体育研究大会佐賀大会に全国から千三百名を超える学校体育・スポーツに関係に携わる皆様にご参会いただき、大会を無事に終了することができました。佐賀県実行委員会関係者一同、心より御礼申し上げます。また、学体連本部の皆様やこれまでの開催県並びに前年度開催の和歌山大会の関係機関の皆様から貴重な資料の御提供や御助言をいただきましたことに重ねて御礼申し上げます。

さて、本県では平成二十六年に開催が決定されて以来これまで、佐賀県の幼児、児童生徒が生き生きと活動する姿を全国

運動やスポーツに親しむ資質・能力を育む保健体育学習」と設定し、実践と研究を重ねて参りました。また評価については、4観点から3観点に変更されることにともない「佐賀モデル」として基本的な考え方をご呈示しました。

大会一日目の佐賀市文化会館での全体会では主催者並びに御来賓の皆様方から大会への期待のお言葉をいただきました。特に、学体連の本村会長様からは、私たち学校体育に関わる者に力強い激励を頂いただき感謝しています。そして記念講演では福島大学の川本先生に、今後の指導の示唆をいただきました。その後、これまでの学校体育の功績に対し、最優秀校・優良校・功労者・優秀教員の表彰がなされました。表彰の学校・先生方には心より敬意を表します。

大会の二日目には、幼稚園二園、小学校四校、中学校三校、高等学校二校、特別支援学校一校のあわせて十二校園で「公開保育・授業」「研究発表・研究協議」を行いました。各校園では、実行委員会と連携して、それぞれの研究主題を設定し、授業づくりを行いました。研究の重点として、今持っている力で運動やスポーツに親しむことからスタートし「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業はどうあるべきかとして、授業デザイン、指導と評価の一体化、深い学びへの誘い、学習環境の整備などを追究しました。また、単元計画や評価計画を作成し、内容を明確にした年間指導計画や生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育成する評価の在り方にも取り組みました。

また、研究協議会に参加された皆様方から多くの貴重な御意見やご助言をいただきましたことに改めて御礼と感謝を申し上げます。

私たちは、本大会の開催の機会をいただいたことで、本県の幼稚園・保育園・小学校・中学校・高等学校・特別支援学校それぞれの研究組織が充実し研究内容がより一層深まりました。さらに、校園種を超えた体育の研究体制の連携は財産となり、これからの更なる発展を期待しているところです。

最後になりましたが、本大会の開催にあたり御指導・御支援を賜りましたスポーツ庁、公益財団法人日本学校体育研究連合会をはじめ、関係大学の指導助言者、佐賀県・市教育委員会の皆様方に厚く御礼を申し上げます。また、この度、表彰を受けられました学校や指導者の皆様にも心よりお祝いと敬意を表し、挨拶とさせていただきます。

第五十八回 全国学校体育研究大会 埼玉大会開催にあたって

埼玉大会実行委員会 会長 品川 秀人



第五十八回全国学校体育研究大会埼玉大会の開催に当たり、御挨拶を申し上げます。

埼玉県では、平成二十六年度に本大会の開催が決定して以来、埼玉の子供たちが生き生きと活動する姿を全国の先生方に見ていただきたいという思いで、大会に向けた準備を進めて参りました。

また、御案内のとおり、幼稚園においては昨年度から新しい幼稚園教育要領が全面实施となり、他の校種においても、全面实施に向けた移行期の中で新学習指導要領の改訂の趣旨や様々な改善点などの理解が求められているところです。

本大会では、新学習指導要領

及び幼稚園教育要領の趣旨と、

これまでの埼玉県における体育研究の成果と課題を踏まえ、大会主題を「新学習指導要領を踏まえた体育・保健体育学習の具現化に向けて」と設定し、副題を「生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを継続できる資質・能力を育成するために」と定めました。この主題のもと、「指導と評価の一体化を図った単元案・単元計画の作成」「主体的・対話的で深い学びを目指した工夫」の二つの視点から研究を進めて参りました。

大会初日となる十月三十一日

(木)の全体会は「大宮ソニックシティ大ホール」で行います。

午前は「開会式」を皮切りに「表彰式」「基調報告」を行います。「基調報告」では、埼玉県における体育・保健体育研究の成果と課題を踏まえ、研究の概要及び研究の視点について報告をさせていただきます。

午後からは「解説」「シンポジウム」「特別講演」を行います。

「解説」では、スポーツ庁教科調査官 横嶋剛氏より「新学習指導要領に基づく体育・保健体育学習の推進」について解説していただきます。「シンポジウム」ではコーディネーターの森良一氏(東海大学教授)と、全国から集まっていたいただいた5名のシンポジストの先生方に「体育と保健を関連付けた体育・保健体育学習の推進」というテーマで討論をしていただきます。

全体会の最後を飾る「特別講演」では、東京ガスケミカル株式会社取締役常務執行役員 阿久根謙司氏に「木の上に立つて見ましよう」選手の自立を引き出すコーチング」と題して講演していただきます。二〇一一年JリーグFC東京社長に就任した同氏は、一年でI部復帰を果たすなどチーム躍進の原動力となりました。考え、工夫する環境を作り、自発的な行動を起

こすための対話に重きを置く独自のコーチング論には定評があります。個を伸ばし、豊かなスポーツライフの実現に寄与する内容の講演は、私たちの今後の取組につながる多くの御示唆をいただけるものと期待しております。

翌十一月一日(金)には、幼稚園一園、小学校四校、中学校四校、高等学校二校、特別支援学校一校の計十二校園で、「公開保育・授業」「研究発表・研究協議」を行います。

午前の「公開保育・授業」では、本大会の主題を踏まえ、各会場校で研究主題を定めました。一つ目の視点は、「指導と評価の一体化を図った単元案・単元計画の作成」です。「指導内容の明確化」「評価の工夫」の二観点による手立てで研究を進めて参りました。二つ目の視点は「主体的・対話的で深い学びを目指した指導の工夫」です。「教材・教具の工夫」「学習過程

の工夫」「学習形態の工夫」の三観点による手立てで研究を進めて参りましたので、御覧いただければと思います。なお、中学校二校、高等学校一校、特別支援学校一校の四校においては、体育授業と併せて保健授業も発表いたします。

そして午後の「研究発表・研究協議」では、埼玉県が取り組んできました内容について、御参会の皆様から御意見・御指導を頂き、実り多い研究協議が行われることを期待しております。そして、これからの学校体育の一助になることを願っております。

大会当日には、全国の学校体育関係者の皆様に多数御来県いただき、未来を拓く子供たちを育てる体育・保健体育学習の在り方について、御意見や御指導を賜りますようお願い申し上げます。御挨拶といたします。

第2分科会	さいたま市立芝川小学校
<公開授業領域> ①体づくり運動遊び（多様な動きをつくる運動遊び） ②ゲーム（ネット型ゲーム） ③陸上運動（投の運動）	
<分科会研究主題> 個の力と集団の力を共に高め、自己肯定感や自己有用感の育成を目指した体育科指導の工夫	
<授業の見どころ> 子どもたち一人ひとりが輝くために、仲間と共に学ぶ大切さを実感できる体育授業を目指します。そのために、個人的達成と集団的達成の双方の確かな成果を導きたいと考えています。	
<授業者の思い・意気込み> 公開①：スパイ活動をイメージした場で用具や器具の操作、力強い動きを身に付けることを目指します。教材・教具の工夫や子どもたちの学び合う姿をご覧ください。 公開②：初めてのネット型ゲーム「ころがしバレーボール」に挑戦し、自分の役割の理解や基本的な技能の向上を目指します。仲間と高め合う姿をご覧ください。 公開③：チームの仲間と共に記録を伸ばすことを目指します。学習の最後には、学級全員がはじめの記録を上回れるかに挑戦します。全員達成なるかご覧ください。	
<指導助言者> 国土舘大学 細越 淳二	

第4分科会	川口市立並木小学校
<公開授業領域> ①器械運動（マット運動） ②ゲーム（鬼遊び） ③器械運動（跳び箱運動）	
<分科会研究主題> 運動の楽しさや喜びを味わい続ける児童の育成～思考力、判断力、表現力を高める体育授業を通して～	
<授業の見どころ> 習得した知識及び技能を活用して、友達と関わり合いながら課題の解決に向けて試行錯誤を重ねる児童の姿をご覧ください。	
<授業者の思い・意気込み> 公開①：自分の課題に気付き、課題に合った練習の場や練習方法を選択し、仲間と関わり合いながら活動する様子をご覧ください。 公開②：楽しみながら進んで運動し、自分やチームのめあてをもって、仲間と協力して生き生きと活動する児童の様子をご覧ください。 公開③：伸膝台上前転の習得を目指す中で、仲間と学び合いながら、試行錯誤して運動する児童の様子をご覧ください。	
<指導助言者> 筑波大学 三田部 勇	

第1分科会	埼玉大学教育学部附属幼稚園
<公開保育領域> 体を十分に動かす遊び	
<分科会研究主題> しなやかな心と体を育む～多様な動きの経験を引き出すための遊びの充実～	
<保育の見どころ> 幼児にとっての日常的な「遊び」の姿や、そこで多様な動きを体験している実際の姿をご覧ください。あわせて、どのような「遊び」の環境の工夫があるのかも見ていただきたいと思います。	
<保育者の思い・意気込み> 研究主題にある「しなやかな心と体」の示す「しなやかさ」について、「柔らかさ」と「強さ」の両面を合わせもつものと捉えています。幼児期運動指針や新幼稚園教育要領を踏まえ、特定の運動に偏るのではなく、幼稚園教育の基本となる「遊び」を通した指導の重要性を再認識し、保育を展開したいと考えています。「遊び」の中で育まれる「しなやかな心と体」について皆さんと議論を深めるための保育提案を目指しています。	
<指導助言者> 埼玉県立総合教育センター 山本 三環	

第3分科会	さいたま市立常盤小学校
<公開授業領域> ①ゲーム（鬼遊び：たからはこびおに） ②ゲーム（ゴール型ゲーム：フラッグフットボール） ③ボール運動（ゴール型：フラッグフットボール）	
<分科会研究主題> 『わかった』『できた』を味わうことができるユニバーサルデザインを重視した授業の工夫	
<授業の見どころ> 系統的な学習過程の中で、主体的・協働的な学びを通して、「わかった」「できた」楽しさを味わい、運動に対する肯定感が高まる体育授業をデザインしていきます。	
<授業者の思い・意気込み> 公開①：相手をかわすため、「すき間」をキーワードにして考えます。宝を運び、満面の笑みをうかべる子供どもたちの姿をご覧ください。 公開②：ボールを持って走り込むスペースを広げるため、3人の動き方を工夫します。作戦をもとにプレーする姿をご覧ください。 公開③：4人での連携した動きを基にして、作戦を組み立てます。スペースをめぐる攻防を楽しみながら取り組む姿をご覧ください。	
<指導助言者> 東京学芸大学 鈴木 聡	

第6分科会	さいたま市立原山中学校
<公開授業領域> ①保健（応急手当） ②球技（バスケットボール）	
<分科会研究主題> 主体的・対話的な学習を図る指導の工夫～『見つける』『考える』『実践する』学びをつなげる～	
<授業の見どころ> 主体的・対話的な学習活動を取り入れ、生徒自ら、生涯にわたって誰とでもスポーツを楽しみ、明るく豊かで活力ある生活を営む資質・能力を育む授業を男女共修で展開します。	
<授業者の思い・意気込み> 公開①：さいたま市は小5から心肺蘇生法実習～ASUKAモデル～の実践に取り組んでいます。身近な事例を取り上げて、自分たちには何ができるのか、仲間と協力してどう対応すればよいのか考えて実践します。学習成果を是非ご覧ください。 公開②：性差、技能差に応じた混成ルール形式による戦術的な課題が誇張されたゲームを提案します。ゲーム中心の授業を展開する中で、生徒一人一人が互いの違いに配慮しながら、誰もがゲームを楽しめる態度の涵養を目指します。	
<指導助言者> 茨城大学 吉野 聡 さいたま市立大宮南中学校 坂田 真澄	

第5分科会	埼玉大学教育学部附属小学校
<公開授業領域> ①ゲーム（鬼遊び） ②陸上運動（走り幅跳び） ③ゲーム（ハンドボール）	
<分科会研究主題> 『わかる』と『できる』をつなぐ思考力、判断力、表現力等を高め、運動への自信をもてる指導の工夫	
<授業の見どころ> 思考力、判断力、表現力等を高めるために、教材・教具の工夫や評価の工夫を中心に授業構想を考えました。子供たちが真剣に考え、運動している姿を是非ご覧ください。	
<授業者の思い・意気込み> 公開①：系統性を意識し、単元の前半と後半でのゲームのねらいを変えました。子供たちが夢中になって遊び、学ぶ姿をご覧ください。 公開②：室内での走り幅跳びで、子供たちは自分たちの課題を意識して、何度も繰り返し跳び、課題を克服していく姿をご覧ください。 公開③：空間を見付け、チームの作戦を成功させるために、子供たちが盾間にしわを寄せ、運動に夢中になって学ぶ姿をご覧ください。	
<指導助言者> 信州大学 岩田 靖	

第8分科会	川口市立南中学校
<公開授業領域> ①器械運動（マット運動） ②保健（がんの予防） ③ダンス（創作ダンス）	
<分科会研究主題> 主体的・対話的で深い学びを実現する保健体育学習～単元の特性に応じた効果的な学習指導の工夫～	
<授業の見どころ> 生徒が、課題解決に向けて、明確な意識を持って主体的に活動に取り組む姿や、対話的な活動を通して自他の考えを深めていく姿。	
<授業者の思い・意気込み> 公開①：個人やペアの課題解決を目指し、学習資料を活用したり、仲間との対話を通して学びを深めたりする姿をご覧ください。 公開②：これまでに得た知識や、資料をもとに生徒が主体的な対話から学びを深め、学んだことを表現していく姿をご覧ください。 公開③：テーマにふさわしいイメージを捉えて表現したり、仲間の個性や表現を認めて創作に取り組む姿をご覧ください。	
<指導助言者> 埼玉大学 細川 江利子 春日部市立川辺小学校 鈴木 美江	

第7分科会	さいたま市立与野西中学校
<公開授業領域> ①球技（ネット型）バドミントン ②陸上競技（混成種目）	
<分科会研究主題> 豊かな『思考力、判断力、表現力等』を育むことで技能向上を目指す授業づくり	
<授業の見どころ> 話し合いや教え合いの活動を通して、生徒たちの「なるほど」「できた!」を引き出し、運動が苦手な生徒にとっても楽しい体育の授業を実践していきたいと考えています。	
<授業者の思い・意気込み> 公開①：ダブルスで攻防をするときの、ペアの課題発見→課題解決の学習→ゲームでの検証という過程で単元を進めていきます。生徒同士の活発な話し合い活動の様子や考えながら活動する姿をご覧ください。 公開②：技能向上のポイントをペアやグループの活動で話し合ったり教え合ったりしながら、自己の課題の解決に向けて活動をする姿をご覧ください。	
<指導助言者> 二戸市立金田一中学校 千田 幸喜	

第10分科会	埼玉県立大宮東高等学校
<公開授業領域> ①球技（バスケットボール） ②体育理論（スポーツの文化的特性や現代スポーツの発展）	
<分科会研究主題> 主体的・対話的で深い学びの実現を目指した体育授業の実践～実技と理論の相互作用とICTの活用～	
<授業の見どころ> 生徒が主体的に生き生きと授業に取り組む姿や、生徒自ら考え対話し、知的に取り組む姿を引き出していきたいと考えております。	
<授業者の思い・意気込み> 公開①：映像遅延装置を活用して、個人及びチーム分析を行うことにより、生徒自身の気づきを促し、自ら主体的に考える力を導き出したいと考えています。大宮東高校伝統の自校体操にも是非御注目ください。 公開②：知識構成型ジグソー法を活用することで、生徒の汎用的スキルの向上を促したいと考えています。新学習指導要領で求められている指導内容のイメージを描いていただけたら幸いです。	
<指導助言者> 宮崎県教育委員会スポーツ振興課 萩尾 英司	

第9分科会	埼玉大学教育学部附属中学校
<公開授業領域> ①武道（柔道） ②球技（バレーボール）	
<分科会研究主題> 『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善～自己の思考を深め、課題をよりよく解決することができる生徒の育成～	
<授業の見どころ> 生徒が試行錯誤を繰り返しながら思考を深め、課題解決に向けて自分と向き合い、協働しながら進んで学習に取り組むことができるような授業を進めていきたいと考えます。	
<授業者の思い・意気込み> 公開①：固め技の簡易試合を中心に相手との攻防を楽しみます。よりよい解の発見や新たな気づきに向け自分の意見をもって対話をさせるなど活動を工夫し、資質・能力の育成を図ります。 公開②：簡易ゲームを行わせ、運動の実感やゲーム記録、観察者からの情報を基に自チームの課題と練習方法について考えさせます。対話的な学びの視点で活動を工夫し、生徒の資質・能力の育成を図ります。	
<指導助言者> 鹿児島大学 與儀 幸朝	

第12分科会	埼玉大学教育学部附属特別支援学校
<公開授業領域> ①体づくり運動・表現運動（リズム運動） ②保健（運動の大切さを考えよう） ③球技（タグラグビー）	
<分科会研究主題> 自らの健康を考え、卒業後も運動に親しむ態度を育成する体育・保健体育学習	
<授業の見どころ> 発達段階に応じて系統立てた取組をすることによって、運動に取り組む楽しさを感じられるようにするとともに、保健領域を関連させて、自らの健康に関心をもって卒業後の生涯体育（生涯スポーツ）につながる取組にしたいと考えます。	
<授業者の思い・意気込み> 公開①：音楽に合わせた様々な運動課題の設定や、教員や児童同士の協同の学びの設定等を通し、運動に親しむ態度の育成を目指します。 公開②：運動に取り組む必要性和その効果について体験的に学習し、自らの健康への関心を高め、運動への動機づけが高まるようにします。 公開③：全員がずっと動く、一人一人が活躍する、達成感もてる、互いに認め合える授業づくりを目指しています。	
<指導助言者> 東海大学 内田 匡輔	

第11分科会	埼玉県立上尾南高等学校
<公開授業領域> ①保健（健康を支える環境づくり） ②球技（ハンドボール）	
<分科会研究主題> 主体的・対話的で深い学びを目指した体育・保健授業～運動に積極的に取り組む生徒育成に向けて～	
<授業の見どころ> 生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続できるように、運動・スポーツの多様な楽しみ方を学ぶ授業内容や保健と体育の関連を図った協調学習の授業展開を見ていただきたいと思います。	
<授業者の思い・意気込み> 公開①：知識構成型ジグソー法の授業展開を用います。生徒一人一人の学びに向かう姿勢、さらに深い学びへと結び付けられるよう、教材・教具にも工夫を凝らした授業をご覧ください。 公開②：学校全体を挙げて準備してきました。これを機に年間指導計画や授業展開も変革いたしました。男女共習の中で純粋に運動を楽しみ、学び合う姿をご覧ください。	
<指導助言者> 秋田市立広面小学校 星野 和貴 埼玉県立大学 高橋 宏至	

令和元年度 最優秀校（文部科学大臣賞）受賞校紹介

札幌市立二条小学校（北海道）

<研究主題>

「自分のよさ（キラリ）を磨き、自信をもって追究する子の育成」

<研究の目的>

子どもを運動に誘う教材の工夫や環境づくりを図ることで、自ら運動に働きかけ、体を動かす心地よさや運動の楽しさを味わい、めあてをもって追究する子を育む

<研究内容と成果>

- どの子どもも楽しめる教材の工夫や、思考力・判断力・表現力等を育む学び合いで、体育授業を充実させた。
- 運動意欲を喚起する環境づくりや運動機会を増やすことで、成果につなげた。
- 子どもの体力向上とともに、課題探求的な授業による授業力向上が図れた。

日立市立十王中学校（茨城県）

<研究主題>

「豊かなスポーツライフを実践するための資質・能力を高める指導の在り方」
—仲間とかかわり合いながら、主体的に取り組む体育授業を目指して—

<研究の目的>

積極的に意見を交わしたり助言し合ったりしながら仲間と連携を図り、体を動かすことで、生涯を通じて豊かなスポーツライフを実践するための資質・能力を高める。

<研究内容と成果>

- 授業の流れを提示することで明確な見通しをもたせ、運動時間の確保に取り組んだ。
- 相互評価や論理的な作戦検討、認め合う場を設定することで、技能向上を図った。
- 生徒同士がかかわり合いを深めることで、意識の変容など一定の成果を上げた。

蕨市立中央東小学校（埼玉県）

<研究主題>

「豊かな心と健やかな体をもち、自ら進んで運動する中東っ子の育成」
—わかる・できる・たのしい を味わわせる体育的活動を通して—

<研究の目的>

仲間とかかわり合ったり外で体を動かしたりする機会が減少している状況を踏まえ、自ら進んで運動する子どもの育成を目指し、体育授業及び体育的活動の充実を図る。

<研究内容と成果>

- 「楽しい」を味わうために、児童の実態に即した「運動の簡易化」等に取り組んだ。
- 授業作りのポイントや「技能」「思考・判断」の系統表を作成し、指導に役立てた。
- 「体育通信」を毎月発行し、家庭との連携による体力向上に取り組んだ。

令和元年度 体育授業優秀教員 受賞者紹介

菅原 純也（すがわら じゅんや） 岩手大学教育学部附属小学校（岩手県）教諭

<実績>

第47回全国学校体育研究発表大会岩手大会第5分科会授業公開

平成22年度子どもの体力向上指導者養成研修「ボール運動」参加・県内研修講師 等

<体育授業における実践>

- 児童の意欲を引き出し、成果の上がる体育授業の在り方について実践的研究及び授業作り
- 知識と技能の往還による技能の習得を目指した指導についての先進的研究実践

山中 崇（やまなか たかし） 皆野町立国神小学校（埼玉県）教諭

<実績>

埼玉県小学校体育研究協議会代表発表者、埼玉県初任者研修体育科指導者

平成30年度各都道府県教育委員会長期研修教員 等

<体育授業における実践>

- 学習の成果を保障する効果的な言葉かけを工夫し、思考力・判断力・表現力を育成
- 「学びの地図」としてのルーブリックの開発による児童同士の教え合いや学習内容の習得

菊地 由記（きくち ゆき） 杉並区立桃井第三小学校（東京都）主任教諭

<実績>

第52回全国学校体育研究発表大会東京大会分科会運営、東京都開発研究委員

東京都小学校体育研究会「多様な動きをつくる運動（遊び）部会」部長

<体育授業における実践>

- 「こつを子供の声で集めた価値付けガイド」や「学習カード」による授業実践、資料提供
- 体育科のよい授業の条件分析及び構造化への取組

畑 成人（はた しげと） 金沢市立大浦小学校（石川県）教諭

<実績>

石川県小学校体育研究会研究部長、金沢市小学校教育研究会体育部会代表運営委員

石川県小学校体育研究大会問題提起、石川県学校体育研究会小松大会発表者

<体育授業における実践>

- すべての児童が運動の楽しさを味わいながら学び合う授業設計
- 思考力の育成、コミュニケーション能力育成のための教材・教具の工夫、学習過程の明確化

久保 明広（くぼ あきひろ） 鳥栖市立弥生が丘小学校（佐賀県）教諭

<実績>

佐賀県スーパーティーチャー【体育・ICT利活用教育】、日本体育科教育学会ラウンドテーブル

第57回全国学校体育研究発表大会佐賀大会シンポジスト

<体育授業における実践>

- 子供の実態を大切に、子供と共に創っていく授業の実践による資質・能力の育成
- ICTの利活用による授業を実践し、公開することで、体育授業の充実・発展に貢献

2019年 全国学校体育実技指導者講習会について

—実技内容のポイント—

幼稚園・保育園の部

第五十回全国幼児の運動あそび指導者講習会 報告

日時 七月二十三日(火)

会場 千代田区立千代田小学校
体育館

参加者 三十七名

主題 運動あそびの充実感につながる環境構成と援助のあり方
○趣旨 日常保育に視点おいた運動会、子どもたちの創作、創造性を駆り立てる運動会を学習。そして、運動会が園生活や遊びに新たな展開を生み出すことを期待する、

①「かけっこがはやくになりたい」

走ることの指導は励ましで終始していかないか。走ることを考えることが出来ない。短距離走から陸上競技で獲得を目指す技術を体験し、こどもの遊びに生



かしてほしい。○走るための技術(体のしめ、接地、脚の引き戻し、○レース構成(スタート、加速走、マーク走など。

(日本陸上競技連盟普及育成委員会副部長、東京女子体育大学・短期大学教授櫻田淳也先生)

②「仲間と支え合い創り上げる組立体操」

組立体操は基本のパーツを組立表現するものを言い表現的身体活動を目的としたピラミッド、扇など静的な運動を含む。パーツが重要になるため、一人ひとりの身体の使い方(手のつき方、関節の固定、支持感覚などあそびを通じて経験して組立体操に繋げる事を伝授。子どもの運動傾向を確認し、安全に行うための子どもへの意識づけと体操での視線の重要性、手の付き方、相手の身体を持つ位置、登り方、降り方、乗せ方、降ろし方を具体的に学んだ。

(さわだスポーツクラブ指導研究開発部長 池谷仁志先生)

③「遊具(巧技台)、バールンミニコーンなど」を用いた運動あそびの工夫―子どもたちのもが自らあそび環境作り―

子どもの理想とするあそびはやりたいことを、やりたいように、やりたいだけやる。教員の役割は、子どもがそのつもりにな



なつてあそぶための環境作りにある。その物の特徴を考えて、それを生かしたあそびを考える。多くの遊具を利用して、自発的な運動から工夫して動く、物に少し変化を付けることで物も変化し関わりかたも変化し、楽しさも変わってくる。あそびの無限性を学ぶ。

(東海大学体育学部生涯スポーツ学科 准教授 知念嘉史先生)

④「幼児が主体的に楽しむ運動会」

創立百五年を迎える慈光幼稚園での運動会の取組が発表される。運動会は昭和五年よりPTA共催事業となり近年では一年生招待会、運動会総練習、運動会、作品展、お別れ会と広がりを見せる。運動会プログラムで

現在も恒例となっている種目は、運動会の歌・はとぼつぽ体操・かけっこ・綱引き・玉入れ・花火(ダンス)・リレー。他種目は、その時々、園児の姿を見ながら新たな競技や発表がされてきた。

高松先生担当の年少組「消防隊になって、火事を消そう」年長組「マラ☆バレ」(ペットボトルを両手に持つてのリズム)子どもと創り上げていった保育の取組が発表された。

最後にマラ☆バレを踊り、参加者のよい振り返りの機会となった。「日々の生き生きとした遊びと同様、運動会が生活の一部として園児にとって自然の出来事であるように迎えたい。」(高松学園幼稚園 主幹保育教諭 高松里子先生)



小学校の部

一日目 七月二十三日(火)

会場 千代田区立昌平小学校・
台東区立黒門小学校

受講者 百四十五名(東京都、
兵庫県、大分県等から参加)

①体育的活動 講師・杉並区立
桃井第三小学校主任教諭 梅林
伸幸 先生他七名

〔昌平小学校体育館〕

○座学

●体育的活動とは何か。

【幼児期における運動遊び】

○手遊び

●花いちもんめ・むすんでひら
いて・一丁目のどらねこ(歌に
合わせて動きを調整する。遊び
のつながりも歌を使って滑らかに)

○じゃんけんあそび

●じゃんけん起き上がり



●じゃんけん鬼
●伝承遊び

【小学校低学年における運動遊
び】

●準備運動「やってみよう」

●五歩鬼

●二人組での陣とりじゃんけん

●UFO(仲間を増やして)(雰
囲気を盛り上げるのもプレー
リーダーの役割である。)

【魅力ある13の運動遊び】

●どんじゃん↓二方向どんじゃ
ん

●しりとび(しりとりと長なわ
とびを組み合わせて)

●角とり鬼

●ピンゴリレー

●パズル&コーン

●腕立てエアホッケー

●激流下り

●エンドレスリレー

●バウンドしりと

●UFO鬼

●ピーターパン

●線切り鬼

●カードキング

幼児期から低学年、そして全
学年に向けた運動遊びの豊富な
展開例を経験することができる
講習内容であった。運動遊びの
日常化について実技を通して考
えることができた。

②器械運動 講師・杉並区立済
美小学校 副校長 難波 誠二

先生 他東京都小学校体育研究
会器械運動系領域部会部員八名
〔黒門小学校 体育館〕

○座学

●安全面への配慮

●技を理解できる資料の提供

●友達とのかかわりがある授業

○準備運動

●ジョギング↓スキップ

○補助運動

●平均台横跳び

●馬跳び

●馬跳び十字跳び

○開脚跳び

●着手 手について前に出す
リズムは足・手・足

(子どものつまずきポイント)

△お尻が後ろにある△手がつっ
かえ棒になる

↓段差を使って肩が着手より出
るようにする。

顔が前に出ても怖くないように
手で肩を補助

※踏み切りを強く、手を前に出
すことでよりよい切り返しので
きる。

○かかえ込み跳び

●うさぎ跳び

●足↓手↓足のタイミング

●腰を高く上げ、足を着手の
位置より前に出す

●支持での跳び乗り

●縦向き跳び箱に支持で乗る。

●正座の姿勢↓足の裏で乗る↓



ばす。

具体的な指導方法の工夫を交
えながらの実技講習であった。
資料も豊富に提供していただき
今後の指導の充実につながる研
修となった。

二日目 七月二十四日(水)

会場 千代田区立昌平小学校・
台東区立黒門小学校

③体つくり運動 講師 京都
ノートルダム女子大学 専任講
師 住本 純 先生 他二名

〔昌平小学校 体育館〕

○二人組での心ほぐし・動きほ
ぐし

●一人でボールに座り、ペアの
相手がマッサージ(上下動をさ
せながら)

●転び方の指導(ボールを抱え
て転ぶ)

●脇から手を入れ後方に引く

●バランス崩し(反射姿勢)

○バランスをとる動き

●手を取って補助↓手を離して
バランス取り

●腹ばいで乗る

●膝で乗る

●四人組で

●八人組で

●ボールを増やしての動き作り

●小ボールを使って↓お尻で乗
る、膝で乗る

○移動する動き

●バウンドくぐり

●バウンドくぐり



● ボールの上を移動する
● うつ伏せでボールの上を移動
● 小さいボールを使った鬼ごっこ（人とぶつからずに相手を探す）

● 足の間に小ボールを挟んでじゃんけん↓負けたら周りを両足ジャンプで移動

● 膝の裏に挟んでじゃんけん↓負けたら周りを片足けんけんで移動

○ 操作する動き
● 小ボール（空気圧五割程度）を大ボールで跳ね返す操作
● 小ボールを大ボールの上に乗せる操作

● 大ボールどうしを当てて取る。
● 背中とお腹でボールを挟んでのサンドイッチターン（ボールを落とさないようにする。）
● 足で挟む動き

● 背中であぐら
● お腹で挟む
○ 力試しの動き

● 体幹に力を入れて、①仰向けで跳ねる ②うつ伏せ腕立て姿勢で跳ねる

● 脇に挟んだ小ボールを取る遊び

● 腕、脚等で挟んだ小ボールを取る遊び

○ 集団達成的課題を与える

● 「あなたがたどこさ」の曲に合わせて、「さ」を言ったときに小ボールを横へパス、自身は隣から来たボールを受け取る。（全員で輪になって行う。）

Gボールの使つての運動は、行い方によつてねらいが異なることが体感できる講習内容であった。安全面への配慮を欠かしてはならないこともご指導いただいた。

④ボール運動 講師 女子美術大学名誉教授 榮 隆男 先生 他五名

〈黒門小学校 体育館及び校庭〉

○ 座学

● フットサルの教育的意味

● 狂句とは真実を教えること

● 体育は実践道徳の教科

● 古代ギリシア、プラトンの四元徳「美育、体育、知育、徳育」

● コミュニケーションスポーツ

○ ウォーミングアップ



● ゲームに応用できる身体接触を含んだメニューで

● ハイタッチ、ロータッチ

● ショルダータッチ

● 腰のチャージ

○ パス練習（止める・蹴る）

● 誰でも容易にできるトウキックを使う。

● 足の裏でボールを止める動作

● 止めたボールを前方に送り出す動作

● 送り出されたボールを自然と前に出たつま先で蹴る

● ボールを止め、足からボールを離さずにロックアップ（左右を確認する）

○ 運ぶ動き

● 止まっているボールを足の裏で操作して運ぶ（足裏ドリブル）

※ボールを足裏でしっかり止め、ゆっくりとした動きで反復していくことで正確な動きの習得が

進む。

○ ゲーム

● チームインテリジェンスについて

● ゲームの評価は「どれだけ楽しめたか」「どれだけ友達のために動けたか」等を中心に。

● 六人対六人のゲーム（五分間）キーパーはなしで行う。

※途中で雨が降り始めたため、体育館でのゲーム後に座学を行う。

○ フットサルの社会的役割について

● 選手がコミュニケーションを取り合い、ゲームに勝つための課題解決を行うこと。

● 問題解決、コミュニケーション、信頼関係が育つゲームである。

あいにく途中から雨天となったためゲームの時間を十分に取れなかったが、フットサルのもつ魅力が生かされ、研修生の間にも積極的なコミュニケーション場面が見られた研修であった。

中・義務教育・

中等教育・高等学校等

特別支援学校の部

日時：八月二十日（火）

会場：慶應義塾女子高等学校大会議室・体育館

①バレーボール講師

社会福祉法人勸能福祉会理事長

岸隆史先生

②ダンス講師

日本女子体育大学教授

宮本乙女先生

本講習会は、全国の特別支援学校・中学校・義務教育学校・中等教育学校・高等学校保健体育指導者が、体育の指導技術の向上を図り、資質の向上と指導の充実・発展を目指すことを目的として行われた。

【午前の部】

「バレーボールの基本理論及びその具体的な指導法」

理論編では、バレーボールの教材観について、「ボールコン

トロールの難しさ」「痛い、怖い、という感情、感覚をあたえてしまうこと」「スパイクが打てない」「ゲームでは次に何をしたらよいのかからない」などの点をあげて生徒が積極的に楽しく授業に取り組むようになるまでには、越えなければならない壁があることの説明があった。そこで、ルールにアレンジを加えて

取り組みやすくする工夫の一つとしてキャッチバレーボールを活用した実践事例を紹介した。実際に八王子東高等学校の授業の様子を映像で見ると、ボールをキャッチできるため、積極的にボールを追いかけていく様

子が見られ、そのために身構えるようになっていった。また、強いスパイクに対してもキャッチ（レシーブ）できたり、レシーブシフトがコンパクトになったり、間のボールが落ちにくい様子が見られた。これらを参考にそれぞれの学校に合わせた工夫が重要である。

実技編では、導入として「泥棒ゲーム（ボール集め）」、「コミュニケーション円陣パス（名前を呼ぶ）」、「一人オーバーストドパス」「ネットくぐりパス」等を実施した。この導入で受講者達の気持ちもほぐれて笑顔が多く見られた。その後スパイクやブロックをどのように指導するかについて解説があり、実際にやってみたところ「できた」という感覚を多くの受講生が持てた。最後にゲームを行ったところ、ボールに積極的に飛びつく受講生もいて非常に盛り上がっていた。



【午後の部】

「生徒が生き生きと取り組む楽しいダンスの授業づくり」生徒の対話的な学びを引き出すことから」

理論編では、学習指導要領の改訂に伴い、主体的で対話的で深い学びについてダンスの授業でどのように実践することが大切か、教師の声かけはどんなものがよいか、授業はDVDの完全コピーでよいのか、などについて丁寧に説明があった。

実技編は、フォークダンス、現代的なリズムのダンス、創作ダンスの三部構成で実施した。

導入はフォークダンス「ヒンキー・ディンキー・パリー・ブー」で受講生同士の交流を楽しみやかな雰囲気醸成された。次に「8421のリズムで踊ろう」リズムを楽しみながら動きを工夫した。まずは、「拍手」「サイドステップ」「アキレス腱」と誰もがができる動きとして、四つめの動きを各グループ（四名程度）で考え行った。8442211と徐々に左右や前後に切り返すタイミングが早くなる動きのため、激しくリズムミカルで楽しい動きとなった。また、それぞれのグループが考えたものを含め、その時間内に発表活動を行うことで、互いに

振り返ることができるようになる。発表の仕方、隣のグループ同士の発表や全体を半分に分けての発表などいろいろあるが、今回は半分で行った。



創作ダンス「しんぶんし」では、新聞紙の動きの模倣を音楽に合わせて表現した。

はじめは座ったままでの動きで、後に立つて動き、その後は先生役をグループの生徒1名にさせて、その動きをまねしていく。さらに自由に動くことで自分なりの動きを作り出していた。実技の途中で会議室へ戻り、実際に中学校の男性の先生が新聞紙を使ったダンスの授業を展開している映像を見た。生徒の反応もよく生き生きとした様子がわかった。

その後「ケンパーダンスでヒップホップ風に」では、子供の頃に誰もがやったことのあるケンパーの動きを音楽に合わせて踊った。これも8421のリズムで踊り、楽しく激しいダン

スとなったと動きの切り替えのポイントを縮めていくと

最後に創作「さくらのエチュード」ではゆったりとした音楽に合わせて、なめらかな動きで関わり合いながらさくらを表現した。二人組でそれぞれが踊っていたものを体育館中央に全グループが集まりそれぞれの動きや決めポーズをすると、いつの間にか一つの壮大なさくらの作品となっていた。

宮本先生はいろいろなグループを周りながら、動きを見て「いいね」「すごい」など積極的に受講生に声かけを行っていた。この「認める・褒める・共感すること」がやる気につながっていたのであろう。

一日を通して、楽しく学びの多い講習・研修会であった。

（報告 九段中等教育学校 長谷川 浩）



三塚太一（鉾田市立旭中学校）

【演題】

戦術的課題の解決に向けて、役割や状況に応じた動きが身に付く保健体育科学習指導の在り方

【概要】

主題に迫るため、守備連携シートを活用したタスクゲームの段階的な実践を手立てとして授業を行った。

授業実践の結果、役割や状況に応じた動きであるベースカバー数が増加した。また、守り方の知識が身に付き、戦術的課題を理解して運動に取り組む生徒が増えた。このことから、守備連携シートを活用したタスクゲームの段階的な実践は、主題に迫るための手立てとして有効であった。

平成30年度 各都道府県教育委員会 長期研修生等合同発表大会

【主 催】（公財）日本学校体育研究連合会

【目 的】

体育、保健体育の指導者の資質向上を図るとともに、各教育機関の教員研修事業の充実に資する。

【日 時】平成31年3月3日（日）

【開催場所】日本体育大学 記念講堂

浅井広太郎（神奈川県立中原養護学校）

【演題】

フェアプレイとチームワークを学ぶオリンピック・パラリンピック教育「ボッチャ」の実践

～美術・情報との関連を図りながら、スポーツの特性を取り入れ、行動目標を明確に示した体育授業～

【概要】

本校では、オリ・パラ教育として、体育でボッチャに取り組んできたが、学習内容は、基礎的な技術の習得に偏ってしまい、スポーツの価値を学ぶまでに至らなかった。そこで、美術・情報との関連を図りながら、スポーツの特性（祭典性等）を取り入れ、行動目標を明確に示し、フェアプレイとチームワークを学ぶオリ・パラ教育を目指した。

山中 崇（皆野町立三沢小学校）

【演題】

運動好きな児童を育てる体育授業の研究

～表現運動における教師の言葉かけとルーブリックに着目して～

【概要】

表現運動系は指導しにくいとする教師が多いことがわかった。特に、評価の仕方がわからないという理由が挙げられた。そこで、明確な評価指針としてのルーブリックの作成と活用、それに付随した効果的な言葉かけについて研究した。以上を踏まえ、児童が主体的に学習に取り組み、動きの質を高め、児童も教師も意欲的に楽しんで授業に臨める授業モデルを模索した。

坂田祐也（篠栗町立勢門小学校）

【演題】

「する・みる・支える・知る」楽しさや喜びを味わう子供を育てる体育科学習指導

【概要】

スポーツの多様な関わり方「する・みる・支える・知る」楽しさや喜びを味わうことができる子供を目指し、走・跳の運動において、「出し合う」「比べ合う」「高め合う」「磨き合う」4つの「伸ばし合い活動」を設定した。子供は友達と考えを出し合ったり比べたり、自分の考えを修正・強化して動きを高めたり動きの高まりを実感したりし、「体を動かす」「動きを見る」「助言する」「運動の行い方が分かる」楽しさや喜びを味わうことができた。

福原秀喜（つくば市立高崎中学校）

【演題】

ねらいや体力の程度に応じた運動の組み合わせ方を理解できる生徒を育てる保健体育科学習指導の在り方

【概要】

生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現するためには、健康や体力の状況に応じて体力を高める必要性を認識し、運動やスポーツの習慣化を図ることが大切である。本研究では、中学校第1学年「体づくり運動（体の動きを高める運動）」における身体活動のメッツ（METs）表を活用した学習過程の工夫を通して、ねらいや体力の程度に応じた運動の組み合わせ方を理解できる生徒を育てる保健体育科学習指導の在り方を追究した。

森田裕一（流山市立鱈ヶ崎小学校）

【演題】

三つの資質・能力をバランスよく育む学習過程の研究

～協同学習を踏まえたハンドボール単元を通して～

【概要】

三つの資質・能力をバランスよく育む学習指導過程を明らかにするために、小学校6年生の児童に向けて協同学習モデルを適用したハンドボール単元の学習指導を行った。その結果、知識や技能の獲得だけでなく、児童同士の関わり合いの促進や社会性の向上が見られ、「知識」「技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力」「人間性」のそれぞれに期待し得る学習成果が得られた。

江越雅之（香取市立小見川北小学校）

【演題】

誰もが空中における身体動作を習得できるはさみ跳びの学習の在り方

【概要】

小学校高学年の「走り高跳び」において、技能レベルにかかわらずどの児童でも空中における身体動作を向上させるために、主要局面で取り組める新たな教材として「トライアングルバー」を開発し授業実践を行った。その結果、空中局面での脚の開き方の技能に向上が見られた。教材としてトライアングルバーを活用することで、走り高跳びにおける空中局面での身体動作の技能が身に付くことがわかった。

宮川尚久（習志野市立第三中学校）

【演題】

中学校ベースボール型「易しい投球に対する打撃」技能向上を図る教材の開発

【概要】

高等学校への系統性を考慮し、中学校第1、2学年を対象とした、易しい投球に対する打撃技能向上を図る教材を開発した。その結果、打球飛距離が向上した。また、ゲームでの外野への打球提供数が増加し、守備の学習機会数（中継など）が相乗的に増加した。そして、授業後の振り返りにおいて、その日に設定された、守備に関する学習内容の記載数も増加したことから、守備の学習にも効果的な影響を与えることが示唆された。

青江智史（芝山町立芝山小学校）

【演題】

「蹴る」「止める」の動きを高める運動実践

～小学校低学年の「ボールゲーム」の教材づくりを通して～

【概要】

「蹴る」「止める」の動きを高めるために、「運ぶ」の要素にも触れられる簡易化されたゲームを開発し、授業実践を行った。その結果、児童は意欲的に活動に取り組み、ゲームでの成功率の向上が見られ、「蹴る」「止める」の動きが高まった。また、体育館で行い、往復でゲームが進行するようにしたことで、児童がたくさんボールに触れることができたことも有効であった。

石井 豪（小田原市立千代中学校）

【演題】

サポートの動きが高まるサッカーの授業

～GPAIによる生徒のゲーム記録を活かした戦術学習を通して～

【概要】

これまでの筆者の授業では、ボールに群がる密集型のゲームになることが多かった。本研究では、その解決のため、パスをもらえる位置に動く「サポートの動き」に焦点を当て、生徒がお互いにゲーム記録を取る活動を生かしながら、リンダ・L・グリフィンの提言する戦術学習を行った。そしてその有効性を検証し、授業提案をすることとした。

荒居晋太郎（鎌倉市立第一小学校）

【演題】

プレー原則が分かって適切な意思決定ができるようになるラグビーの学習

～発問による気付きの時間と意思決定の機会を保障する学習過程を通して～

【概要】

本研究では、知識と技能を結び付ける体育の授業を目指し、発問による気付きの時間と意思決定の機会を保障する学習過程により、すべての児童が、プレー原則が分かって適切な意思決定ができるようになることを考えた。そして、その有効性を検証し、小学校第3学年のラグビーの学習における学習過程モデルを提案することとした。

岩城節臣（船橋市立高郷小学校）

【演題】

マットにおける思考力を育む体育学習の在り方
～「できるーできない」の狭間に着目して～

【概要】

「できるだけ体育」から子供たちと共に「学びを創る体育」を目指し、「できるーできない」の狭間に着目し、学習過程と教材づくりを手立てとして、できるかできないか自体を楽しめる学びを研究実践した。そこで働く力は、問題解決をしていく思考力であると仮説を立て、児童の発話の質と量を分析した。その結果、有意な増加が見られ、児童の思考力の発揮が明らかとなった。

渡辺陽子（桜川市立岩瀬西中学校）

【演題】

勝敗を競う楽しさや喜びを味わいながら空間をめぐる攻防の知識と技能を身に付けることができる
保健体育科学習指導の在り方

【概要】

「球技ネット型（バドミントン）において、相手側のコートと自分のコートの空いた場所をめぐる攻防ができるような思考を促す発問と学習教材の工夫を手立てとして授業実践した。戦術的課題と中心発問、課題解決のためのタスクゲームに関連性をもたせ、思考・判断を中心に据えた学習を展開することは、空間をめぐる攻防の知識と技能を身に付けることに有効であることが明らかとなった。

諏訪幸市郎（東松山市立青鳥小学校）

【演題】

生き生きと学び、運動好きな児童を育てる体育授業の研究
～「跳び箱運動」のかかわり合い・認め合い・教え合いを通した体育授業の改善～

【概要】

第6学年を対象に「跳び箱運動」の実践を通して、「かかわり合い・認め合い・教え合い」の体育の授業づくりの要点を明らかにした。教師による「説話」や個が高まる時間と集団が高まる時間（シンクロ跳び箱）の学習過程を組み、児童の変容を多方面から分析した。温かい雰囲気や自己肯定感や充足感が増し、運動好きな児童が育つということが確かめられた。

川端健司（神奈川県立相模向陽館高等学校）

【演題】

「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指した保健学習
～考えてみたくなる発問による単元を通した知識構成型ジグソー法の活用を通して～

【概要】

本研究においては、話し合い活動に慣れていない生徒が多いクラスにおいて、考えてみたくなる発問による、対話的に学ぶ知識構成型ジグソー法を、単元を通して活用し、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指した。また、その有効性について具体的に検討し、知識構成型ジグソー法のポイントを提案することとした。

吉田恭一（八千代市立勝田台小学校）

【演題】

主体的・対話的で深い学びを通した体育授業と学級集団意識の関連性

【概要】

陸上運動領域（ハードル走、投運動）において「運動の場や条件の工夫」、「学習過程の在り方」、「運動が苦手な児童、運動に意欲的でない児童への教師のかかわり」を手立てとした体育授業を行い、これらが体育における学習成果と肯定的な学級集団の育成にどのような影響を及ぼすか検証した。

その結果、「記録や動きの向上」、「協力的に学習する意識の高まり」を主とする学習成果が得られた。また、単元後に実施した学級集団意識調査では単元前の高い水準が維持され、体育授業における意識変容と学級集団意識の変容に関連性が認められた。

西川裕樹（さいたま市立大牧小学校）

【演題】

体育科における「主体的・対話的で深い学び」の在り方

【概要】

本実践の学習内容に相当する知識は、「役割ごとの動き」と「得点を取るための作戦」である。課題解決学習を通して、知識に迫り、能力を身に付けていく学習過程を組み立てた。作戦シートに記録した情報から個人やチームの課題を見付け、課題を解決するために、アタックでねらう場所やトスを上げる位置、アタックの強弱・方向を選んだり修正したりする活動を通して、「思考力、判断力、表現力」を高めるネット型ゲームを実践した。

令和元年度 ジャスぺ 足育（あしいく）の推進について

— 足が変われば『明日』が変わる —

菊づくり 菊見るときは

かげの人 吉川英治

の接続を図るべく

足育指導資料第三集が完成し

た。当初五千部を印刷したが直ぐに在庫が無くなり、再度、一万部を増刷した。

万部を増刷した。

JASPE 足育創設以来九年目にして時代が求めるカリキュラムマネジメントを踏まえた小学校における足元からの健康づくりの体系に一步近付いた。

第三集の特徴は第一に児童の発達段階を踏まえた教育内容を提示できた。第二は、靴教育の内容を加えた。第三に、一単位時間のみならず、十分間でできる指導の展開を加えた。

今後の課題は、足元からの健康づくりの習慣化をどのように図るか。児童の足を計測し足に合った靴を用意しても「きつい」との反応にどう応えるか。そして、靴教育の知識及び技能をさらに丁寧な研究実践して加えることである。

さらに、足育の在り方を実践的に究明し、幼稚園や中学校と

『幼児における足育指導資料』
『中学校における足育指導資料』
を作成することである。
この一年の歩みを振り返り、
これからの取組を記す。

一 足育推進委員会（九回）

① 第三集の内容の検討、特に新学習指導要領下における足育の教育課程への位置づけ『足育の見方考え方』を踏まえた『資質能力』の育成

② 埼玉県全国大会への対応

③ 靴教育の講義の受講

④ 推進園・校の実施状況の把握とその支援

⑤ 推進園・校のデータ分析

二 足育調査研究委員会（三回）

① 足育第三集の内容の検討

② 靴医学会における JASPE 足育の発表、幼児教育学会における 青南幼稚園の実践の発表

③ 足育推進園港区立青南幼稚園、足育推進校東村山市立八坂小学校の実践への助言

三 出前授業・講演（十回）

① 高輪幼稚園 2 回

② 小学校・町田市立小山中央小学校、那覇市立内間幼稚園、小学校・那覇市立壺屋小学校、足立区立花畑小学校、墨田区立幼稚園長会研修会、世田谷区立松原小学校、練馬区立南町小学校常陸太田市立世矢小学校、さいたま市立与野西中学校杉並区立高井戸第三小学校

校
○児童…三百七十五名

○教職員…百七十二名

○保護者…八十三名

四 令和元年度の取り組み

（一）足育研究推進園・校

① 十二月五日（木）港区立青南幼稚園発表会

② 十二月十四日（土）東村山市立八坂小学校報告会

（二）出前授業

○足立区立千住本町小学校○大島町立さくら小学校○幼稚園子育て研修会○練馬区立南町小学校○杉並区立桃井第三小学校等

（三）全国大会・福井県

① 令和元年七月二十六日金②会場 福井商工会議所

③ 研修内容

・靴教育の講演会
・ジャスぺ足育模擬授業
・ギユツと足育の模擬授業
・足指体操等

足育推進委員会委員

○内木勉…練馬区立大泉北小学校校長・委員長

○眞砂野裕…昭島市立成隣小学校副校長

○難波誠二…杉並区立済美小学校校長

○武田千恵子…足立区立足立小学校主任教諭

○吉川則久…八王子市立第三小学校主幹教諭

○濱田 哲…台東区立石浜小学校主幹教諭

○小島大樹…調布市立第三小学校指導教諭

○西島秀一…世田谷区立松原小学校主任教諭

○両角知子…八王子市立第五小学校主任教諭

○前村章太…台東区立根岸小学校主幹教諭

○平 武史…台東区立根岸小学校

学校主幹教諭

○岩田純一…墨田区立業平小学校指導教諭

○寺内周平…葛飾区立松上小学校主幹教諭

○市川洋一…東村山市立八坂小学校主任教諭

○丸田樹理…板橋区立高島第六小学校養護教諭

○村瀬智美…品川区立源氏前小学校養護教諭

○倉前広子…江戸川区立船堀幼稚園主任教諭

○小井土円香…葛飾区立上平井小学校主幹教諭

○千葉富美江…小平市立学園東小学校指導教諭

○富岡将人…足立区立足立小学校主幹教諭

○梅林伸幸…杉並区立桃井第三小学校主任教諭

○早川家正…日本教育シュールズ協議会理事長

○武原充宜…日本教育シュールズ協議会理事

○早川侍揮…日本教育シュールズ協議会理事

○早川侍揮…日本教育シュールズ協議会理事

○早川侍揮…日本教育シュールズ協議会理事

○早川侍揮…日本教育シュールズ協議会理事

靴医学会での論文発表

JASPE足育の目指す
幼児・児童・生徒の足元からの健康づくりの教育としての取組が、医科学のエビデンスにかなう実践であることを証明するために、靴医学会の検証を得ることとした。

【演題】

足育（あしいく）、足と靴の健康教育

―学校現場における取組―
Ashiku, Health education
of feet and shoes,
Approach at school site.

【要旨】

子供の足についてのトラブルが多く報告されているにもかかわらず、学校の教育課程には、足や靴についての指導内容は示されていない。足元からの健康教育である「足育」を学校教育に位置付けるための実践を、足育授業の概要を中心に報告する。研究内容を客観的に検証するために、足育調査研究委員会

を設置し、足育授業の前後における園児・児童の意識の変容を検討した。

足育の授業を通して足や靴に対する正しい理解と健康な生活とを関連付けて行動できる児童が増えたことが分かった。

【緒言】

（財）日本学校保健会とJES日本教育シューズ協議会が小生から高校生まで一万百五十五名に行った調査（平成十八・二十年）では、四十三パーセント

の子供が何らかの足のトラブルを抱えていることが分かった。特に、足長に対して大きめの靴を履いている子供（七十%以上）のトラブルが多く、足に合った靴を正しく履く取組の必要性が明確になった。しかしながら、学校の教育課程には足や靴についての指導内容は示されていない。そこで、（公財）日本学校体育研究連合会では、足元からの健康教育である「足育」を学校教育に位置付けるために、公

立幼稚園教諭・小学校教諭・養護教諭等からなる足育推進委員会を設置し、授業を通じた実践をしてきた。なお、公益に資する事業目的に則り、利益を目的とする他の団体との区別するため、本会の英語表記（Japan Alliance for School Physical Education）の頭文字をとり、「JASPE足育」と称することとした。

主に、希望する学校の土曜学校公開等で「出前授業」を実施し、足育の周知に努めてきた。また、研究内容を客観的に検証するために、足育推進校（園）として、都内の公立幼稚園・小学校を各一園一校選定し、足育授業の前後における園児・児童の意識の変容を検討した。足育授業の概要と、足育推進校（園）の意識の結果を報告する。

【対象と方法】

平成二十八年四月より平成三十年三月の期間、足育推進校（園）にて、足育の授業を実施

した。対象児童数は四百六十八名、園児数は六十三名である。足育授業の実施前と実施直後、そして、学習内容の持続効果を確かめるために授業実施二ヵ月後の三回にわたり質問紙によるアンケート調査を実施した。

四十三パーセントの子供が何らかの足のトラブルを抱えているという危機的状況を回避するために足育の必要性を認めつつも、教育課程の基準である学習指導要領に基づいていなければ、実施をすることができない。小学校学習指導要領では、「特別活動」の内容に「日常生活や学習への適応及び健康安全」があり、幼稚園教育要領には、五つの領域の一つに「健康」がある

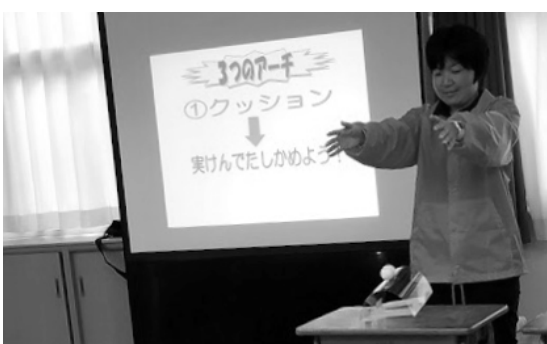
ので、小学校、幼稚園における「足育」はこれらを根拠として編成した。

足育についての実践を広く世に問いたいと考え、その手だての一つとして出前授業を行った。出前授業は、初めて出会う子供たちに対して行うため、効率よく分かりやすい展開が必要である。そこで、全ての授業を、課題に気付かせる「そうか」、

なるほどと思えるための可視化を図る「そうだ」、実践に向けた意識、意欲を高める「そうしよう」の三段階で構成することとした。以下、二つの事例を紹介する。

四年生では足の機能構造のうちの土踏まずに着目し、その機能に関する授業の展開を図る。土踏まずを形成する三つのアーチの機能を、児童が理解しやすいように、①クッションのはたらき、②重いものを支えるはたらき、③バランスをとるはたらきと捉え、身近にある物を足に見立てた実験を通して視覚化を図った。

例えば、クッションのはたら



足育授業の様子（3つのアーチの役割）

きでは、下敷きを曲げてセロハンテープでとめてアーチをつくり、その上に温泉卵を付けて落とすと、アーチがクッションの役割を果たしていることが確認できる。

その後、土踏まずを形成する一助となる「足指体操」を紹介し、進んで足指を動かす習慣化を図った。

五年生では、自分の靴の観察を通して、靴の履き方を振り返るとともに、足長と足幅の計測を通して自分の足に合った靴を正しく履くことのよさと意欲を高める。

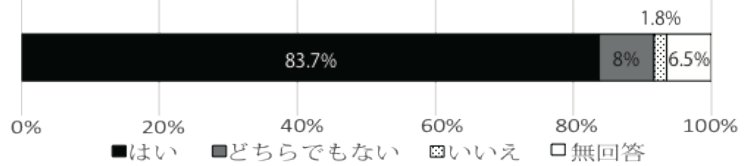
【結果】

足育推進校で授業後にアンケート調査を実施したところ、足育プログラムは自分の健康な生活に関係あることだと回答した児童は全体の八十三パーセントを超えた。

また、足育推進校（園）で靴の脱ぎ方・履き方について四つの手順に沿って質問をした。なお、園児が質問を理解して正しく回答することは難しいため、保護者の協力を得て、子供の脱

「今日勉強したことは、自分の健康な生活に関係あることだと思いますか。」

足育推進校 M小学校 1～6年 399名



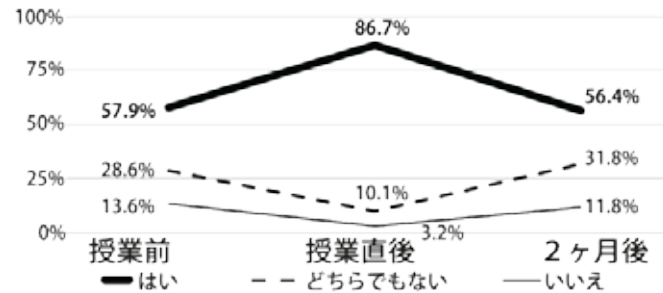
ぎ方・履き方の様子を観察した結果から回答を得た。

脱ぎ方については幼稚園ではあまり変化が見られなかったものの、小学校では七十二パーセントの児童が靴をゆるめてから脱ぐようになった。

靴の履き方については、幼稚園でも小学校でもかかとをトントンして履く園児・児童の割合が増えた。しかし、いずれも半数を超えるには至らなかった。

「どうやってとめるか」につ

「靴の履き方に気を付けようと思いましたか。」 足育推進校 M小学校 1～6年 399名



いての質問からは、足育授業前後で変化が見られるが、幼稚園児の九パーセント、小学生の十四パーセントが依然としてなにもしないで靴を履いていることが分かる。

「靴の履き方に気を付けようと思いましたか」という質問に対しては、授業直後で八十六パーセントという比較的高い数値を示した。しかし、それにもかかわらず、授業実施後二ヵ月後には五十六パーセントまで低下した。

【考察】

足育の授業をすることにより、靴の脱ぎ方や履き方について短期間で意識が変化することが分かった。一方で授業直後は高い数値を示すものの、二ヵ月後に同様の調査をすると、靴の履き方についての意識が低下することが分かった。このことから学習内容の持続効果に課題があることが分かった。

足元からの健康教育であることを考えると、習慣化していく必要があるが、学校現場では授業時数に限りがあるうえに、指導する教科も内容も多岐にわたるため、どの学年においても年間一時間程度の確保が現状において限界である。

子供たちの足のトラブルを回避し、望ましい生活習慣を確保するためにも、足育を学校教育に位置付けることは急務である。四十五分の足育授業を核にして、十分程度で「いつでも・どこでも・誰でも」できる『ギョツと足育』の更なる充実を図るとともに、様々な健康問題に適切に対処するために、社会に開かれた教育課程の一環とし

て学校と家庭、地域社会を結ぶ組織である学校保健委員会の活動を充実させていく。

【まとめ】

足育の授業を通して足や靴に対する正しい理解と健康な生活とを関連付けて行動できる児童が増えた。今後は、自分の足のサイズに合った靴の使用と、積極的に運動に親しむ子供の育成を、運動能力と体力の向上・けがの防止の見地からさらに検証していく。また、全ての幼稚園や小学校の教師が授業として実践できるよう資料や教具を整え、健康に関する教育課程としての足育の一般化を推進していく。

本事業の実現に当たっては、井口傑日本靴医学会前理事長に、靴医学会発表への道を開いて頂くとともに、発表の方法、査読など細やかな援助を頂いた。今後は、足育の推進に関わる実証的な調査研究の客観的なデータが整い次第靴医学会等関係の学会に研究実践の価値を問うようにしていく所存である。

平成三十年度・平成三十一年度 足育（あしいく） 研究推進校報告

東村山市立八坂小学校

本校は、平成三十年度に公益財団法人日本学校体育研究連合会より、足育研究推進校の指定を受け、健やかな子供を育むための研究に取り組んでいる。

「だれもが楽しめる体育学習」児童が主体的に課題を解決し、たくなる手立ての工夫」を研究主題に設定し、体育授業の改善を図ってきた。また、本校児童の実態から見えた課題から、子供たちの運動の日常化をテーマにした体育的活動の取組も行っており、今年度は二年目となる。

平成二十九年度に全校児童を対象に行ったアンケート調査で、「休み時間に外でしつかり体を動かしたか」という設問に対し、三割の児童が否定的な回答をした。また、放課後や休みの日に、校庭や公園等で友達と遊ぶ子供の姿が少なく、家の中でゲームをする等、屋内で遊ぶことを好む傾向にあることがわかった。

子供たちに「体を動かすことがもっと好きになってほしい」

「様々な運動に触れ、日常的に運動に取り組めるようになってほしい」との教師の願いから、本研究主題を設定した。

研究一年目の昨年度は、特に運動に対して苦手意識のある児童への、指導方法、用具の工夫、課題の持たせ方、振り返りの仕方について、重点的に研究を行ってきた。また、体育的活動「八坂ハッピータイム」を年間計画に位置付け、休み時間に子供たち全員が様々な運動に触れるよう、教員が一丸となって取り組んだ。

昨年度の研究成果として、否定的な回答をした児童が半減し、運動好きな児童が増えたことが挙げられる。休み時間や放課後に進んで遊ぶ子供が一割増加した。

研究二年目にあたる今年度は、さらに運動好きな子供を増やす取組を充実させるとともに、低・中・高学年の二学年ごとの系統性を意識した体育学習の指

導について研究を進めている。

本校における足育の取組

本校の各学年の靴箱に、先人の教えを基にした言葉「くつがそろうと心もそろう」を、運動委員会の児童が中心となって掲示した。

朝登校した時、靴の踵を揃えることで、一日の始まりを気持ちよくスタートし、下校する時には、上履きを揃えることで、子供たちが心穏やかに一日を終えることにつながっている。



子供たちの靴に目をやると、一人ひとりの靴の状態が違うこ

とに気付く。靴が足のサイズに合っていないために、踵が潰れている子、靴の一部分が大きく擦り減っている子、靴紐が緩い子などである。

昨年度、三年生を対象に足の計測と、フットプリンター体験を実施した。足育推進委員による出前授業を通して、自分の足に合った靴を履くことがなぜ大切なのかを指導していただいた。今年度は、以下の取組を通して、「足育」を全校児童や保護者に引き続き啓発していく。

1 児童への日常的な足育推進
全校朝会や集会で、足に関する基礎的な知識を定期的に指導し、足についての興味・関心と理解を児童が深められるようにする。また、足育指導資料第三集の指導案を参考にした授業を実施する。

2 実態調査の分析と公表
保護者向けに足に関する実態

調査を実施する。子供の足や靴の選び方等についての情報収集及び分析を行い、その結果を保護者に伝え、子供の足や靴に關しての正しい知識を紹介する。

3 十二月に「体育健康教育地区公開講座」の開催
足育をはじめ、全学級で体育授業や健康に関する授業を公開する。また、授業後には、保護者を対象に、講師を招いてシンポジウムを開催する。

足で踏ん張れない子供

本校の体育的活動「八坂ハッピータイム」は、十二種類の遊びを二十三ヶ所に分かれて行っている。その遊びの一つである「綱引き」は、五メートルの綱を数名ずつが互いに引っ張り合うというものである。

本校では、休み時間にも綱引きで自由に遊べるようにしている。

一年生と綱引きをする機会があった。一年生一人当たりの平均体重がおよそ二十二キログラムとして、五人いれば、その五倍の百キログラム以上になる。

体重差では大人の方が不利な状況なのに、結果は常に子供が負けとなってしまう。「社会的サボリ」であるリングelman効果を差し引いて、さらに履いている靴の性能の差を考慮したとしても勝敗は見えており、歴然である。



そこには、足の踏ん張り方の技能が影響しているのではないかと思う。

休み時間の綱引きは、その綱に集まってきた子供だけですべて運営されている。学年も人数も関係なく、どちらのチームに

加わっていても気にする子供がおらず、人数に差があったり、途中から反対側に寝返ったりしても誰も文句を言う子はいない。「引く」だけをルールとして、よく遊んでいる。

六年生は、体づくり運動の学習で、力強い動きを高めようと綱引きを取り入れた。

児童が綱を引くときの足の踏ん張り方を観察していると、大きく三つのパターンがあることが分かった。

①両足を揃えて綱を引く子。

②体の重心を後ろ足に預けて引く子。

③前に出した足のつま先に力を入れ、突っ張っている子。

①では、相手に綱を引っ張られまいとして、踏ん張るものの、左右に振られると足に力が入らない。

②では、後ろに引こうとするあまり、後ろ足だけに荷重がかかり、前側の足が浮いてしまつて、十分に踏ん張ることができない。



①両足を揃えて綱を引く子。



③のタイプでは、綱と体が一直線上にあり、前に伸ばした腕も肘が曲がることがない。このような状態だと、相手に引っ張られても、前側の足で踏み止まることができるため、最も引く力が強くなる。

③のタイプの体の使い方をしている児童は、数名であった。一年生が五人がかりで大人に挑んでも勝てない要因は、踏ん張りがきく体の使い方ができないことにある。

子供たちが心身ともに健康であるためには、子供自身が自己の体に気付くための環境づくりが大切であると考え。第二の心臓とも言われる足のことについての教育が重要であることに、研究を通して改めて気付かされた。



教師自身が進んで学び、保護者にも協力を得ながら、「チーム八坂」として、これからも足元からの健康教育を推進してまいりたい。

本研究の調査研究を客観性と妥当性の視点からより一層精度を高めるために平成二十六年度から『足育調査研究委員会』を設置しております。足育推進幼

稚園・推進校である港区立青南幼稚園と東村山市立八坂小学校の二年にわたる実践的な研究を支えたのは、次の委員です。

足育調査研究委員会

- 岡出美則…学体連理事長（日本体育大学教授）委員長
- 早川家正…日本教育シューズ協議会理事
- 井口 傑…日本靴医学会前理事長
- 吉村真由美…早稲田大学人間科学学術院招聘研究員
- 浅野明美…全国養護教諭連絡協議会会長、常陸太田市立世矢小学校 養護教諭
- 眞砂野裕…昭島市立光華小学校 副校長
- 濱田 哲…台東区立石浜小学校 主幹教諭
- 西島秀一…世田谷区立松原小学校 主任教諭
- 倉前広子…江戸川区立船堀幼稚園 主任教諭
- 内木 勉…練馬区立大泉北小学校 校長
- 矢部 崇…東村山市立八坂小学校 校長
- 新山裕之…港区立青南幼稚園 園長
- 柿沼敦子…港区立高輪幼稚園 園長
- 寺内周平…葛飾区立松上小学校 主幹教諭
- 菅原健次…学体連理事
- 吉永武史…学体連参与（早稲田大学准教授）

研究主題 「幼児の靴の履き方とその習慣形成のために」

—— 足や靴についての意識と発達段階に応じた指導の工夫 ——

港区立青南幼稚園

I 主題設定の理由

一般的に保護者は我が子に大きめサイズの靴を選ぶことが多い。靴の履き方が悪くて脱げたり転んだりすることもある。実際に保育現場でのケガは転倒によるものが多く、足に合った靴を正しく丁寧に履く習慣を身に付けることは極めて重要である。

文部科学省の「幼児期運動指針」では、幼児期には一日六十分以上楽しく体を動かすことが大切であり、しかも遊びや生活の中で多様な動きを体験することが重要であると示された。それを受け、多くの園で日々の教育活動の中で、自発的に体を動かしたくなるような環境構成や指導の工夫をしている。

「脚下照顧」の言葉の通り、丁寧に靴の脱ぎ履きをし、揃えて仕舞うなどの行動を身に付けることで、気配りや思いやりの心を育てることができ、心をとめて落ち着いた生活をする基盤づくりにつながると考える。体を育てる意味からも、心を育てる意味からも、教育において、

特に幼児期の教育における「足育」のもつ意味は極めて大きいと言える。しかし、実際には幼児が自分の足に合った靴を履いていない例も多くあり、靴の正しい履き方の指導法やそれが身に付きやすい靴についての検証も十分に行われていないと言えない。

II 研究の方法

平成三十年度・令和元年度の二年間、「JASPE足育」の足育推進園の指定を受け、幼児の靴の履き方とその習慣形成のための指導法やそれにふさわしい靴の開発と、足や靴についての意識と発達段階に応じた指導の手順について明らかにすることを目的とし研究と実践を進めることとした。

研究の一環として、JES日本教育シューズ協会の協力の下、平成三十年度から上履き、令和元年度は上履きに加えて外靴の貸与もしてもらっている。貸与の前には、専門家による足の計測と足型測定、フィッティングなどを行い、日常的には教

員による環境整備や指導により、正しい靴の履き方や足にフィットした感覚を身に付け、よりよい靴の開発に協力している。

III 研究の内容

一 足を育てる取組

本園は、起伏に富んだ自然豊かな園庭があり、幼児は園庭で思い切り体を動かして遊ぶことを楽しんでいくが、転んでケガをする幼児が多かった。手を使わずに片方の靴で反対の靴のかかとを押さえて脱いだり、マジックテープが緩いまま履いたりする幼児もいた。一方で、靴への関心が高い保護者が多かった。

そこで、JASPE足育指導資料第3集に示されている、幼児期における足育の目標「自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする意欲を高め、足元からの健康づくりに必要な習慣や態度の素地を身に付ける」を生かし、多様な体の動きを引き出す環境と指導の工夫を進め、幼児の心身の成長を促すこ

とができるよう、足育推進園としての指定を受けることとした。具体的には、外壁工事のために設置されたスチール製のフェンスを活用し、マグネットを使って投げた動きを引き出す遊具を開発するなどの工夫をした。



市販のぽっくりや牛乳パックで作ったぽっくりで遊べる環境を用意し、自分から主体的に取り組むようになると、友達との動きが刺激となり、取り組む幼児が増えてくるようになった。

二 適切な行動を促す教材としての靴の研究・開発

平成三十年九月より、適切な指導方法を開発したり、指導のポイントを明らかにしたりする目的で「JES・7300」という靴を貸与してもらった。この靴の最大の特徴は、幼児が自分で両手を使ってフィッティングができるよう甲のベルト部分が増えている点である。全体

の強度もあり、かかと部分のホールド感もしっかりとしており、サイズも5mm間隔で、インソールも標準装備されており、成長に合わせた調整が可能である。しかし、実際に履いてみると不具合が見付かり、この靴の課題の発見と改良が足育研究の大きな使命の一つとなった。

しっかりと履いているのに甲のベルト部分が外れている幼児がいることが気になっていた。担任への聞き取りや幼児の様子を観察によると、教わった通りに履いていても外れてしまう例があることが分かった。すぐにJES理事長の早川氏に実態を見てもらおうと、マジックテープの強度や面積の不足と甲のベルト部分の長さが足りない場合があることが分かった。その後、製造業者に幼児が履いている様子を見てもらい、課題を共有し、靴の改良を進めてもらった。

足幅対応シューズ

JES-7300



マジックテープの強度の改良が施された靴が完成した。足の成長に合わせた靴のサイズ調整も必要になってきた令和元年五月二十二日に、改良版の靴への取り換えを行った。体を動かす遊びをたくさんする園庭で履く外靴「JES・瞬足」も併せて貸与してもらうこととなった。



年度が代わり、改めて幼児も教師も足育についての意識を高める目的で、「足育研究所の発足式」という形で、四、五歳児を集め、JES理事長早川氏に「足育研究所の博士」として話しをしてもらった。子どもたちを「子ども研究員」と呼び、幼児も自分事として足育について受け止められるよう工夫した。

「早川博士」からは、貸与する靴について、「すでに皆さんからの意見でマジックテープの部分で改良してあります。もっ

といい靴にするために、皆さんには日本の代表としてこの靴を履いてもらいます。どうぞよろしくお願いします」と励ましてもらい、子ども研究員としての自覚をしっかりとつぎつかけとなった。この「子ども研究員」という言い方は、その後、折に触れて自覚を呼び起こすきっかけの言葉となり、教師による指導においても有効活用できるキーワードとなった。また、発足式の後、四、五歳児は全員、早川氏による足の計測とフィッティングを行った。

この貸与靴は、「ベリベリトントングューピタ」の合言葉で、二枚重なった甲の部分を手で左右に引っ張ることで、足にしっかりとフィットさせることができる設計の優れた靴であるが、その甲のベルト部分の呼び方には課題があった。

羽根や耳と呼ぶことが幼児にとっては分かりやすいと思われるが、人権や動物愛護の観点からは耳や羽根を引っ張るという表現はいかなるものかと、園内で問題提起があった。また、引っ張る部分に目印になる色やマークなどがあれば分かりやすく、指導もしやすいのではないかとという意見も出された。その点については、日々幼児



と生活を共にしている教師の感覚を生かし、甲のベルト部分の両側に異なる色を付け、また色覚に障害があっても見分けられるように形を変えることを要望として伝えている。

九月の幼稚園公開の親子活動では、貸与された靴により親子みもてる工夫として、親子で上履きに絵や目印を描いたり、足や足指を使った遊びを楽しんだりすることを計画している。

十二月の実践報告会までには、これまでの「青南足育研究所」の子ども研究員や大人研究員からの意見が反映された改良版の靴が完成して、日本の代表として、子ども研究員たちが履く姿を見ることが楽しみである。

三 履き方の指導のポイント

靴の履き方は年齢によって徐々に上達するが、適切な指導法による繰り返し指導が不可

欠である。三歳児のめあては、「動きが分かり、自分で完結できる」ことであり、指導のポイントは、「丁寧に覚える」ことである。四歳児のめあては、「確実に正しい履き方ができる」とであり、指導のポイントは、「手先を器用に使い、正確に行える」ことである。五歳児のめあては、「次のことを考えて行動できる」ことであり、指導のポイントとは、「落ち着いた生活のための一ステップ」であることを念頭に置いて指導することである。



「ベリベリ トントン グューピタ」のリズムを口頭から伝えたり、靴箱の近くにポスターを貼って自分たちで確認し合ったりできるようにしてきたことで、丁寧に履こうとする幼児が増えてきた。

四 足に合った靴を正しく履くことの効果の検証

幼児の成長・発達には決して一つだけの要因で変容するようなことはなく、様々な複雑な要因・要素が重なり合って変容を見せるものである。

その上で、ケガの記録を検証したところ、ケガの原因は衝突に次いで転倒によるものが多いことが分かった。ケガと靴の関連性については不明だが、足育の取り組みの前後での変容について現在検証中である。

土踏まずの形成や運動能力の変容についても、JESの協力を得ながら、一年目の九月のフットプリンターによる足型測定の結果と、二年目の九月の結果を比較することで検証したいと考えている。

IV 研究のまとめ

研究を通して、足に合った靴を履き、足のフィット感を幼児期に体感することの重要性を実感している。また、ポイントを押さえた指導で、手を使って丁寧に脱いだり履いたりする習慣を身に付けることもできつつある。更に現場の声が靴の改良につながり、正しい履き方が身に付きやすい靴が開発されれば研究の大きな成果である。

足育研修会（福井大会）

令和元年7月26日（金）

全国大会を翌年に控えた地域で夏季休業中に開催してきた足育研修会も今年で七回目を迎えました。今年度、福井県で実施した足育研修会の様子をお伝えします。

主催者挨拶 日本学校体育研究連合会

会長 本村 清人

足育推進圏では、子供たちの活動量が高まったという成長が見られた。この取組が全国に広がってほしい。



主催者挨拶 日本教育シューズ協議会

理事長 早川 家正

心よりの感謝をお伝えします。この研修会が来年の全国大会の成功の一助となりますように。



挨拶 福島県保健体育研究会

会長 木本 健

足育について「知る」「学ぶ」ことは非常に重要。足育には大きな意義があります。来年11月福井大会です。福井から提案していきます。



挨拶 JASPE足育推進委員会

委員長 内木 勉

足育を学校教育に根付かせます。今日の「模擬授業」「ギュッと足育」「足指体操」を体験して意義を体感してもらいたい。



講演「学校教育の新分野・シューエデュケーション」

早稲田大学人間科学学術院 招聘研究員 吉村眞由美



日本では靴について学ぶ機会が少ない。靴教育を通じて育てたい力は、

①靴の機能性選定力 ②靴のサイズ選定力 ③正しい履き方行動力 である。

靴について知らないと「もったいないサイクル」になって、どんどん足に合った靴を正しく履く機会が遠のいてしまう。



- ・指導者自身の靴選びの知識を身に付けさせる
- ・指導者自身の靴のはき方を身に付けさせる
- ・子供の靴のはき方を見て指導する

以上の3つを今後していく必要があります。

実践 小学校を対象とした「足育」授業の試み

指導内容の体験として、

- ①模擬授業
- ②ギュッと足育
- ③足指体操

を体験してもらいました。



模擬授業では、正しい靴のはき方を伝えました。会場の方々は自分の足型を見て気を付けるポイントを学んだり、実際に自分たち足のサイズを測ったりして、自分の足についての関心が高まっていました。



ギュッと足育では、普段の授業と関連付けた足育を行うことで、より効果が出るようにと計画した実践を体験してもらいました。1つ目は、3年生の保健と関連させた「足の洗い方」。足も手と同じように清潔にすることが必要性を伝えました。2つ目は、6年生の理科と関連させた「足は第二の心臓」です。足を動かすことで、健康な生活につながることを伝えました。



足指体操では、分かりやすい指示のもと足と手の握手をしたり、足指を動かす体操に取り組んだりしてもらいました。参加者の皆さんは、真剣な中にも楽しみながら参加してくださいました。

会の開始前や休憩中には、フットプリンターや簡易計測器を体験する人が多くいました。自分の足裏の形や正しいサイズを知ること、より足育に関心を寄せている姿が見られました。

会の終了後に足育推進委員会で福井大会の様子を振り返りました。

○今回、私たちの力を引き出してくれたのは、福井の先生方のおかげ。真剣に聞いてくれる方々がいたからこそ今回の発表ができた。

○授業にいきなり入るのは、会場の雰囲気ができていないのでアイスブレイクは必要。

○ギュッと足育は前後とのつながをもっと考えるとよかった。

○足指体操はどこでやると効果的か。意味のある流れで行う必要がある。

今後の出前授業や次年度の研修会に生かして参ります。

平成30年度 個人賛助会員

個人賛助会員 (10,000 円)

北海道	引地 秀美
	若林 利行
	谷坂 常年
青森県	齋藤 実
岩手県	松尾 和彦
秋田県	堀川 茂進
山形県	斎藤 英敏
福島県	慶徳 秀夫
	福士 寛樹
	矢澤 良伸
	比佐 功
茨城県	谷田部 孝子
	永田 博
	堀越 淳
群馬県	金子 健司
	栗原 雅仁
	谷 勝彦
埼玉県	森田 哲史
	鈴木 雄二
千葉県	津野 政彦
	山崎 成夫
東京都	中村 豊
	土肥 和久
	寺村 尚彦
	柴野晃 一郎
	長塚 琢磨
	山崎 要
	平本 浩実
	岩田 純一

神奈川県	小澤 好一
	沼田 誓子
新潟県	齋喜 和彦
	諸橋 徹
	上野 裕文
	宮崎 繁夫
富山県	中嶋 賢和
石川県	西川 茂治
	松本 亮
福井県	野瀬 聡
	朝賀 博美
長野県	湯本 修
岐阜県	政井 裕司
静岡県	鈴木 珠美
	太田 仁美
山梨県	松野 正士
愛知県	岩田 浩幸
滋賀県	町釋 恵
大阪府	小林 猛
	松元 利男
	橋本 寛
奈良県	上東 祥浩
和歌山県	亀位 直規
鳥取県	黒見 博
	松浦 靖明
岡山県	坂元 佳彦
広島県	土生 士郎

徳島県	松田 雄史
	桂 由美
	中田 寛志
愛媛県	松岡 誠一郎
高知県	川島 祥嗣
福岡県	丸山 晴幹
	深山 典嗣
佐賀県	上野 志信
熊本県	久保 明博
鹿児島県	馬場 義彰
沖縄県	佐事 安弘

過年度高額個人賛助会員
平成 25 年度
青森県 柿崎 紀一

平成31年9月期 法人賛助会員

児島 株式会社
JES 日本教育シューズ協議会
株式会社学研教育みらい
株式会社大修館書店
フットマーク株式会社
教育シューズ振興会
学校体育シューズ研究会（株式会社アスティコ・協和株式会社）
株式会社第一学習社
株式会社ギムニク
日進ゴム株式会社
株式会社光文書院
大日本図書株式会社
東京書籍株式会社
セノー株式会社
廣済堂あかつき株式会社
株式会社ミカサ
一般社団法人WSSA-JAPAN
株式会社 三和製作所
ブランロッシュ株式会社
東商アソシエート株式会社
株式会社エバニュー
東洋館出版社
プラス株式会社ジョイントテックスカンパニー
株式会社正進社
カシオ計算機株式会社

〈大会協賛企業〉

東武トップツアーズ株式会社

本財団事業は「公益信託日本教育シューズ学校体育振興基金」から
助成を受けております

誰でもかんたん&楽しく 使えるボール

バランス
感覚

投げる
力



ソフトギムニクってどんなボール？

準備
片付けが
簡単

空気を抜くのは3秒！
膨らますのも簡単！

触り心地が
ソフト

身体に当たっても
痛くありません！

レベルに
合わせた
空気圧に
できる

空気を半分程にすれば
片手でつかめます！

座っても
大丈夫

耐荷重は100kg
あります！

リードプラスティック社製
ソフトギムニク (SOFTGYMNIC)

表面に凹凸がないフィット感のあるタイプ

NEW TYPE

カラーバリエーションは4種

95.09NR / レッド
95.09NG / グリーン
95.09NY / イエロー
95.09NB / ブルー

表面に凹凸がある手触りの良いタイプ

BASIC TYPE

カラーバリエーションは4種

95.09R / レッド
95.09G / グリーン
95.09Y / イエロー
95.09B / ブルー



特定非営利活動法人
日本Gボール協会
<http://g-ball.or.jp>



日本体操学会
<http://taisou.jp>



株式会社ギムニク
www.gymnic.com

日本学校体育研究連合会賛助会員

GYMNIC BALANCE

祝 第58回全国学校体育研究大会 埼玉大会



体育実技
スキルアップ
支援ソフト

見て、撮って、比べて、共有する。
体育とタブレットPCの親和性で、
スキル習得を確かなものに。

価格 学校内フリーライセンス
200,000円(税別)

小学校
中学校

- ・お手本映像を見る、自分の動作を撮って確認する、それらを比較する、また記録として残すことができます。
- ・お手本の映像と同じ大きさ・アングルで撮影できるようなガイド機能を搭載しています。
- ・自分の動画や友達のを共有でき、「教えあい」「学び合い」の学習スタイルにも適しています。

豊富なお手本動画



自分の動きを撮影し、確認する



解説映像との比較画面



動画再生画面



営業総轄本部義務教育部 〒114-8524 東京都北区堀船2-17-1 Tel:03-5390-7481 Fax:03-5390-6012
教育事業本部 営業部(東京) 〒114-8524 東京都北区堀船2-17-1 Tel:03-5390-7451 Fax:03-5390-7582
ホームページ…<https://www.tokyo-shoseki.co.jp> 東書Eネット…<https://ten.tokyo-shoseki.co.jp>

スクールシューズのプレミアムスタンダード 教育シューズ® PK-X3



極める

グリップ性
耐久性
超軽量

technology



着脱・フィット感

- 靴のペロ部分は、靴紐でペロがずれないように一体カットになっています。
- 履きやすいようにペロの先端に引き上げつまみが加工され巻き込みを防ぎます。



かかと加工

- 踵にネームスペースと踏みつけ防止加工を施しました。



ソール

- 安定性
サイドスタビライザーによる、ねじれの防止
- ノンマーキング
オリジナルソール
最適なグリップ力で、前後左右の激しい動きに対応します。

(公財)日本学校体育研究連合会賛助会員 TEL(086)243-2218 (製造部) 日進ゴム株式会社 TEL(086)243-2467
教育シューズ振興会 FAX(086)243-2253 <http://www.nisshinrubber.co.jp>
E-mail:kyouiku-shoes@nisshinrubber.co.jp

本書を読んで、子どもが課題を解決する体育授業へ!

小学校 これだけは
知っておきたい

新



体育授業 の基本



日本体育大学教授
白旗和也
〔著〕

「日本は体育の環境が世界一?」「体育授業はどのように変わるのか?」「体育科における『主体的・対話的で深い学び』とは?」。本書では、このような今、求められる体育の課題や、全運動領域の指導の基本をワンポイント解説。これを読めば「体育授業」のすべてがわかる!

新学習指導要領で 東洋館出版社
「体育」はどう変わる?



POINT 1
授業をする前に
大事なポイントが
分かる!

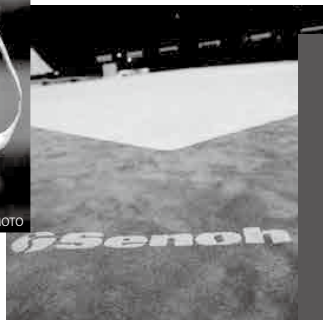
POINT 2
低・中・高学年の
すべての運動領域を
ワンポイント解説!

POINT 3
体育における
「主体的・対話的で
深い学び」が分かる!

白旗先生 待望の
最新刊!

----- ご注文はこちら! -----
46 判・180 頁
定価 1,944 円 (税込)





全力のそばにいること

コンマ1秒の戦いに挑むこと、
悔しい思いに涙を流すこと、
少しでもうまくなるために毎日練習すること、
勝利の喜びも、できるようになった感動も、
いつもスポーツに全力でがんばる人のそばに



Senoh

セノー株式会社 〒270-2214 千葉県松戸市松飛台250番地
Tel:047-385-1111 Fax:047-385-1123 <https://www.senoh.jp>



足の成長を一番に考えた「教育シューズ」

教育シューズ®
A **イスMV3**



安全で快適な
ポイント

- 1 通気性
- 2 安定性
- 3 クッション性
- 4 快適性

教育シューズ®

プレミアム誕生!

(公財)日本学校体育研究連合会賛助会員
教育シューズ振興会

TEL(086)243-2218 FAX(086)243-2253
(製造部) 日進ゴム株式会社 TEL(086)243-2467
<http://www.nisshinrubber.co.jp>
E-mail:kyouiku-shoes@nisshinrubber.co.jp

【新体力テスト集計・分析システム】

(文部科学省発表新体力テスト準拠)

体力づくりをめざして

- 個人票はカット済み
- 部活顧問用資料を充実
- 測定実施の完全バックアップ

集計・分析処理料金(1人分)

240円(税込)



みつめたい教育と未来

第一学習社

以下の資料をお届けします

- 学校総括表
- 順位一覧表・級門分布表
- 判定別一覧表
- 生徒指導カード(個人カード控え)
- クラス台帳
- 生徒指導台帳
- 部活分析表
- 運動部活別比較表
- 部活台帳
- 学校集計資料・保健部資料
- ★教育委員会提出資料を完備

TEL 082-234-6806 FAX 082-503-3084 〒733-8521 広島市西区横川新町7-14

●大阪支社/☎06-6380-1391

●新潟営業所/☎025-290-6077

●横浜営業所/☎045-953-6191

●福岡営業所/☎092-771-1651

●札幌営業所/☎011-811-1848

●つくば営業所/☎029-853-1080

●名古屋営業所/☎052-769-1339

●金沢出張所/☎076-291-5775

●仙台営業所/☎022-271-5313

●東京営業所/☎03-5803-2131

●神戸営業所/☎078-937-0255

●沖縄出張所/☎098-896-0085

プラスの 校歌でダンス®

アレンジ校歌・ダンスをCD・DVDでお届け!

point

アレンジも振付も
完全オリジナル!

point

運動会の演目・体操、
周年記念や地域のダンスなどに!

point

地域に根付いた校歌なので
幅広い年齢層で一緒に楽しめる!

ご利用料金
(参考)

校歌アレンジ・振付

1曲: ¥ **98,000** +税

出張ダンスレッスンも
ご相談ください!

サンプル映像を
公開中!



PLUS の教材 
<https://pluskyouzai.jp>

プラス株式会社 ジョイントテックスカンパニー 教育事業担当へお問い合わせください。

東北: Tel 022-214-6623

関東: Tel 048-642-7755

東京: Tel 03-6205-8570

東海: Tel 045-201-2121

中部: Tel 052-262-1271

関西: Tel 06-6241-0567

中四国: Tel 082-545-0201

九州: Tel 092-283-5211

沖縄: Tel 098-915-0066



新しい・体育の授業づくり

編著者 勝亦紘一 中京大学名誉教授 家田重晴 中京大学教授

体育の授業や運動部の活動を通して、
生徒が楽しみながら生涯スポーツの基礎を築くための指導者の道標

ISBN 978-4-477-02631-2 ■ B5判/208頁 ■ 定価：2,200円(本体2,000円+税)



たのしいたいいく

新学習指導要領に対応して完全リニューアル。

新たに「投の運動」「ハンドテニス」の内容を取り入れました。

B5判/オールカラー/56~88頁 ■ 教師用指導書つき ■ 定価：各540円(本体491円+税)

大日本図書 130th
https://www.dainippon-tosho.co.jp

本社 東京都文京区大塚3-11-6 【書籍部】 ☎ 03(5940)8679
中部支社 名古屋市千種区内山1-14-19 高島ビル ☎ 052(733)6662
関西支社 大阪市北区東天満2-9-4 千代田ビル東館6階 ☎ 06(6354)7315
九州支社 福岡市中央区赤坂1-15-33 ダイアビル福岡赤坂7階 ☎ 092(688)9595

スクラボ SQLabo 教材総合カタログ

School Laboratory

学校教材を研究するという意味から、「スクール+ラボラトリー」の略語として名付けられた総合カタログ「スクラボ」。深い学びに繋がる教材を開発、流通し、全国の教育委員会や小・中学校にお届けしています。



子どもたちの
健康な体づくりを、
「スクラボ」が
全力
サポート！



Medical & Care



Safety & Security



Education & Learning



Green & Eco

「ひとの健康と安全を守る」



sanwa 株式会社 三和製作所

〒132-0021 東京都江戸川区中央 4-11-8 tel.03-5607-7811(代) fax.03-5607-7812 https://www.sanwa303.co.jp

学習指導要領準拠 小学校体育科 準教科書

体育の学習

全面改訂して
2020年4月
発行予定！

児童書 1～6年

全学年
オール
カラー

定価 各学年
510円(税込)

指導書 1～6年

定価 各学年
2,900円(税込)

※価格は変更になる可能性があります。注文時にご確認ください。



A4変形判に
大きくなりました！

連続写真で
わかりやすく解説！



NEW!



二次元コードから
動画が見られる！！

『体育の学習』対応 デジタル図書教材

デジ体

デジタル体育

DVD版

アプリ版

- *DVD版「デジ体」は、児童書+指導書をセットでご探採いただいた場合のみ、指導書冊数分をお送りします。
 - *アプリ版は、児童書+指導書のご探採校へ認証コードをご提供します。認証コードで、全コンテンツが利用できます。
 - *アプリ版は、アプリストアからインストールしてご利用ください。
- 対応OS:iOS9.0～11.2, Windows10
(2019年8月現在)



よくある「つまずき」に対応した
解決法を動画で確認！

動画撮影＆
保存機能も！
動きの確認や、
評価に役立つ！



デジ体の
詳細は
こちら⇒



学ぶことが好きになる。
光文書院

〒102-0076 東京都千代田区五番町14
TEL.03-3262-3271(代表)
FAX.03-3230-4190
<https://www.kobun.co.jp>

1,000 分の 1 秒を競う 世代を超えて夢中になる



私たち WSSA-JAPAN は日本における
スポーツスタッキングの普及を推進しています

Physical
Exercises
Gymnastics
Track&Field
Swimming
Basketball
Handball
Soccer
Volleyball
Soft Tennis
Table Tennis
Badminton
Softball
Judo
Kendo
Sumo
Dance
Skiing
Skating
Outdoor

学校体育教育の新時代をひらく あかつきの副読本&ワーク



図解
中学体育



新保健
体育ワーク



新保健
ワーク

お手もとに，ぜひ。

<http://www.kosaidoakatsuki.jp/>



廣済堂あかつき株式会社

〒176-0021 東京都練馬区貫井4-1-11
編集部 ☎03-6435-6690(体育)
営業部 ☎03-3577-8966

あかつき



公益財団法人 日本学校体育研究連合会 優良体育用品

Mikasa
Sports every day!



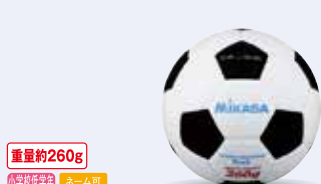
重量約280g

小学生全館

ネーム可

本体価格 ¥2,500+消費税

【スマイルサッカー4号】



重量約260g

小学校低学年

ネーム可

本体価格 ¥2,400+消費税

【スマイルサッカー3号】



重量約260g

ネーム可

本体価格 ¥2,800+消費税

【スマイルフットサル3号】



SFLL3-Y

SFLL3-P

空気を入れない
フットサル

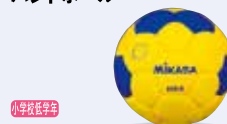


重量約300g

本体価格 ¥2,000+消費税

【ソフトタイプフットサル】

空気を入れない
ハンドボール



小学校低学年

本体価格 ¥2,000+消費税

【ハンドボール0号】



本体価格 ¥1,500+消費税

【フラッグフットボール】



FFF-BL (1セット)



FFF-Y (1セット)

本体価格 ¥1,200+消費税

【フラッグフットボール用フラッグ 1セット】



重量約430g

ネーム可

本体価格 ¥3,000+消費税

【スマイルバスケット6号】

セストボール



本体価格 ¥2,200+消費税

【セストボール】

ブレルボール



重量約210g

ネーム可

本体価格 ¥2,400+消費税

【ブレルボール】

空気の入れ過ぎにご注意ください。最適圧力はボール本体の空気注入口に記載の圧力表示、もしくはサイズ表示をご参照ください。

「中学 保体資料ノート」

毎年新しいコンテンツが続々と登場！



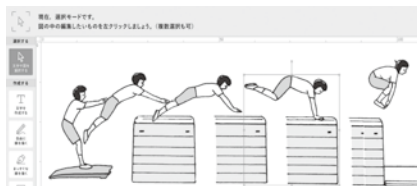
保健体育の先生方
の間で話題に
なっています！

9 正進社
SEISHINSHA

<http://www.seishinsha.co.jp/>

POINT 1

学習カードやテスト作りに便利！
「いじれるイラスト素材」



▶イラストの一部を移動したり、消去したり、
角度を変えたり、自由に加工できます。

POINT 2

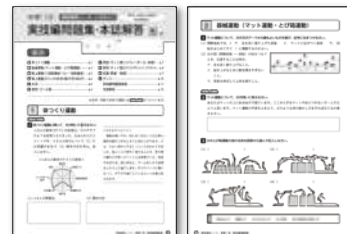
動きをじっくり観察できる！
「お手本動画」



▶横・正面からの映像で動きを確認できます。

POINT 3

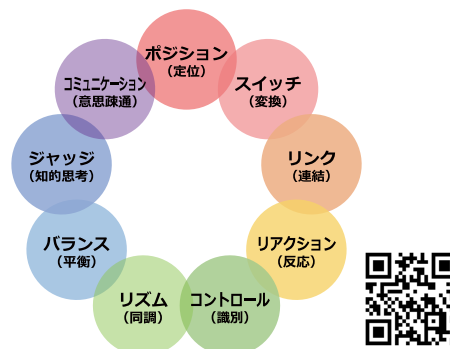
テストやプリントにも使える！
別冊「実技編問題集」



▶思考・判断をはかる問題を収録しています。

にこすぽ

にこすぽ®はEVERNEW®製品を最大限に活用する
オリジナル体づくり運動プログラムです。
にこすぽ®を通じて"カラダ"と"ココロ"を結びつなぐ
9つの運動能力を育みましょう。



詳しくはこちらから

こんな子どもの運動能力を向上させます。



モジモジ



バランス感覚 (不安定)



手がつかない



うまく捕れない



うまく投げれない



まっすぐ走れない

EVERNEW

クライミングで 遊びながら 体力づくり



★クライミングの効果

- 腕・腹筋・背筋・脚の筋肉に加え、バランス感覚をフル活用することで、総合的に体力を向上します。
- 大きな達成感が、自分自身への信頼と自信 (セルフエスティーム) を生み出します。
- 登っている人を応援、一緒に考えることでコミュニケーション能力が育まれます。

クライミングのことなら弊社におまかせください。30年間で700ヶ所以上のクライミング施設を施工し、年間70件以上の保守点検も実施。
(国内シェア70%以上)

豊富な経験とノウハウで、安心のサポートをいたします。

東商アソシエート株式会社 クライミング事業部

〒104-0033 東京都中央区新川 1-3-3

TEL: 03-4321-0142 FAX: 03-4321-0141

<http://www.climbing-tosho.com/>



フルオーダーメイド
ユニフォーム



フルオーダーメイドシューズ

Blanc Roche



【取引先】

都内を中心に100校以上の幼稚園・小・中・高・大学

《部活・体操着・水着・上履き・通学帽・体育教材・備品》

ゴール・ネット・マット・支柱・ハードル・プールフロア・ラインカー

ネーム加工 ユニフォーム・シャツ・ジャージ・バッグ・ボール

【取扱いメーカー】

アシックス・ミズノ・アディダス・ナイキ・プーマ・ノースフェイス・チャンピオン・アスレタ・コンバース・デサント・D&M・ゼット・エスエスケイ・ウィルソン・ハイゴールド・アンブロ・シュアプレー・ヒュンメル・ルコック・ディアドラ・ペナルティ・モルテン・セイコー・ゴーセン・ニューバランス・ヨネックス・ナガセケンコー・エバニュー・トーエイライト・ミカサ・鐘屋産業・奏運動器具工業・仲條・成美堂スポーツ出版・ダイケントップ・ニチバン・KT・ルーセント・ヤサカ・ヤマト卓球・日本卓球・タマス・九桜・早川繊維 他多数

「体育ICT」向けプロジェクター ～体育館使用にオススメ～

カシオのプロジェクターは
有害な水銀を使いません。



Point1

速

すぐ点く

最短5秒投映！

Point2

楽

長持ち

長寿命光源！

Point3

耐

埃に強い

防塵設計！

CASIO



XJ-S400WN

4000ルーメン

WXGA

スピーカー付

カシオ計算機株式会社

〒151-8543 東京都渋谷区本町1-6-2

製品情報 <http://casio.jp>

《機能・操作・購入先等のご相談窓口》

ナビダイヤル：0570-088988 ※全国一律料金

<http://casio.jp/support/contact/before/>

PHS・IP電話・公衆電話からは03-5334-4785

受付：月～土曜日(AM9～PM5:30) 弊社指定休業日除く

本財団は「公益信託日本教育シューズ学校体育振興基金」から

助成を受けております

Gakushin®

SCHOOL SHOES
S-2800



S P E S スペース
学校体育シューズ研究会
School Physical Education Shoes

School Shoes としての耐久性
ただ長持ちさせるのではなく、
運動性能と安全性能も大切です。

協和株式会社 神戸市長田区西尻池町1丁目3番8号
TEL : 078-611-4376(代)

GOLDSTAR
SPORTS SCHOOL SHOES

GX



体育館
シューズ

S P E S スペース
学校体育シューズ研究会
School Physical Education Shoes

高機能・ジャストフィットを実現
超軽量モデル 片足 (24.5cm) 290g

ASTICO 岡山県岡山市中区江並417-1
株式会社 アスティコ TEL : 086-276-2010(代)

クロールで25m泳ぐ近道。

クロールで25

浮く運動が苦手な児童に役立つ練習用具を提案します。
卒業までに【全員が25m泳げる】のために。

がんばる先生応援サイトオープン!
各学校の水泳授業情報を配信しています。

※現役の先生を対象とした会員登録制です

<http://www.swim-teacher.jp>

検索 水泳common



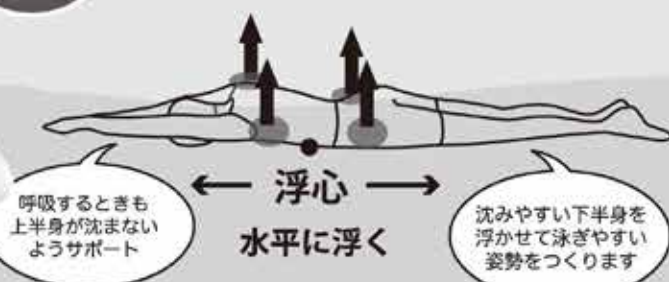
★ご登録された方にスイムキャッププレゼント★

品名:クロールで25
品番:132139
サイズ:120~170cm
カラー:紺色のみ・男女兼用
仕様:オールインワン型水着
浮力シート8枚セット
価格:4,500円(本体価格)



泳げる近道
1
着るだけで
水平に浮く

体を4点の浮力で吊り上げ、水平姿勢(ストリームライン)をつくる水着です。



泳げる近道
2
浮力が調節
できる

習得段階に合わせ浮力の調節ができます。最後は浮力シートなしで泳げるよう補助。

前にフアスナーがあるので着替えも簡単!



水着の内側にあるポケットへ浮力シートを入れます。(左右に装着)



上達したら薄いシートへ交換

すまいるスィムシリーズ

【超はっ水で速乾・軽量】

速乾

軽量

超はっ水

超はっ水だからできる速乾・軽量!

着用者の90%以上が軽さを実感(当社比)。



水にぬれても、肌にはりつかずさらっとした軽い着心地
超はっ水だから...「着替えがラクラク!!」

*使用後の持ち運びもラクラク! *通常の水着より速く乾きます!

安全・安心!!「赤外線盗撮」から子供達を守ります。

●水を弾き軽い! 体が浮く感じ!

●はっ水効果は3年以上持続!



赤外線盗撮防止素材を採用! 安心・安全な水泳授業を応援!
フットマークだけのオリジナル新素材!

技術企画・開発(協賛特許) 朝倉染布 株式会社 / 山田化学工業 株式会社

フットマークの新素材は、赤外線を吸収する染料加工を施すことで
悪質な赤外線盗撮を予防し、赤外線盗撮から子供達を守ります!



「生地が柔らかく脱ぎやすい!」

従来品

新商品

www.footmark.co.jp

※右記までご連絡下さい。資料等をお送り致します。

フットマーク株式会社 スクール販売部

東京都墨田区緑2-7-12 TEL:03-3634-0506

FOOTMARK®

大修館書店

■ご注文は… ☎03-3868-2651 (販売部) <https://www.taishukan.co.jp>

*定価=本体+税



●四六判・210頁 本体1,500円

本村清人 [著]

「知・徳・体」を育む 学校体育・スポーツの力

体育の価値を
再確認する
保健体育教師
必読の書!

高校保健体育教師、教育委員会指導主事、さらには文部科学省体育官といったさまざまな立場で学校体育・スポーツに関わってきた著者が、これまでの学習指導要領の作成経緯や教育理念をわかりやすく解説。改めて学校体育・スポーツの重要性を説き、その担い手である保健体育教師に激励の言葉を贈る。保健体育教師はもとより、学校長、指導主事にとっても貴重な1冊。

【主要目次】序章 スポーツ庁の設置と学校体育・スポーツの発展／第1章 「体育」「スポーツ」の位置づけと学習指導要領／第2章 教育理念「生きる力」と学校体育・スポーツ／第3章 「知・徳・体」を育む授業の要／第4章 学校体育の現場を支える人材の重要性／第5章 教育活動の一環である運動部活動の意義／終章 学校体育・スポーツの力

コアとなれ、学校体育・スポーツ!

研究と実践の架け橋になる月刊専門誌

■毎月14日発売 ■本体830円 ■B5判

体育科教育

『体育科教育』の定期購読をおすすめします! 以下の特典があります。

① 年間購読料10,043円(税込) 1号分サービス! ② 送料無料!

お申し込みは小社HPで! …こちらのQRコードからもアクセスできます▶



授業風景の
動画配信
やってます!

口絵カラーページで紹介している授業の動画が見られます!

いつでも
どこでも
無料
視聴!



雑誌にスマホをかざすだけ!

*画像はイメージです。
*別途、通信費がかかります。



子どもたち一人ひとりの未来のために、
豊かな“学び”を提供します。

※本冊に掲載の情報は、2018年10月現在のものです。変更となる場合があります。詳しくは、各店舗またはお問い合わせください。

株式会社 学研教育みらい

小中教育事業部

TEL 03-6431-1151(代表) 〒141-8416 東京都品川区西五反田2-11-8

学研 学校教育ネット

<http://gakkokyoiku.gakken.co.jp/>



facebookページ
もあります



旅が、
未来の
わたしを
つくる。

www.tobutoptours.co.jp

東武トップツアーズは、全国学校体育研究大会を応援しています。



観光庁長官登録旅行業第38号 © JATA正会員・ボンド保証会員

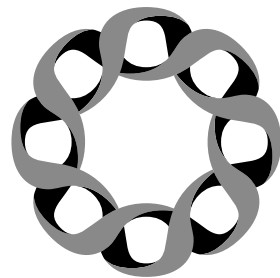
東武トップツアーズ

TOBU TOP TOURS

東武トップツアーズは、
東京2020オリンピック・パラリンピックを応援しています。



東京2020オフィシャル旅行サービスパートナー



Columbine

The Guardian of School Life



願いをカタチに

私たちは常に、
子供たちにとって
<安全>で<安心>して
学校生活を過ごせる
「良品提供」をお届けします。

(公財) 日本学校体育研究連合会賛助会員

(公財) 日本学校体育研究連合会推薦品

 児島株式会社

本社／〒711-0911 岡山県倉敷市児島小川 2-4-60

TEL 086-473-4634 FAX086-472-0866

関東営業所／〒330-0855 埼玉県さいたま市大宮区上小町 1085

TEL 048-642-5883 FAX048-642-4766

盛岡営業所／〒020-0846 岩手県盛岡市流通センター北 1-4-18

TEL 019-638-7501 FAX019-637-0144

URL:<http://www.kojima-gp.co.jp> E-mail:gyomu4@kojima-gp.co.jp